

263.5

34



始



水田光著



お話の研究

大日本図書株式会社發行

大正
5. 6. 14
内交

序

言靈の幸はふ國と自稱したるにも關らず、談話語も十分に發達せず、傳説童話の分量も甚だ貧弱であるのは何故であらう。文學文章すべて支那を宗として、國語は日常の用談だけに用ひられたのが、談話語の發達しなかつた一大原因である。又支那や印度から傳はつた傳説が、我が思想界を風靡して、固有の神話傳説が全く顧みられなかつたことは、我が國の文學美術に徴しても明瞭である。語を換へていへば、國語の獨立もなく、思想の獨立も無かつたやうな有様である。國語の獨立は明治の世に於て、

國語を以て教育の基本とせられた時に始つて居る。思想の獨立も之と共に次第に出來上りつゝある。日本文明の經過から言へば、決して外國の文明を拒絶すべきでは無い、寧ろ其の長所を採つて進んで行くべきであるが、之と同時に、日本固有のものを忘れてはならぬ。國語は益之を發達させなければならぬ。古來の傳説も益之を整頓し、研究しなければならぬ。これは世界文明に接觸した現代に於て、一層大切な事と信するのである。本書が教育上の見地から、博く外國の學説を參考して、お嘶の研究を試みたのは、日本傳説童話の研究の上に、一道の光明を與へたものと思ふ。余は國語教育の爲に深く之を喜

とするのである。國語教育といふことは語學の教育ではなく、國民思想の教育であるからである。

大正五年四月

芳賀 矢一

しるす。

凡例

- 一、本書は父兄及び教職にある人のために、「児童のためのお話」を教育的方面から研究したものであります。
- 二、本書は理論の研究に力を注ぎ、併せて優秀な「お話」を其例話として巻尾に一纏にして附加して置きました。ただ紙數に限りあるため、僅に三十餘話を擧げるに止めねばならなかつたのは、遺憾であります。
- 三、「お話」は世界各國のものを採りましたが、中には原話其儘でなくて、私の作意を加へたものもあります。それは「児童のためのお話」として、一層適切にしたいと思

つたからであります。

四、童話の例話中で(十三)腹中の鳥は活動性を缺いてゐる點
三に於て、(十四)借金の悪計は其主旨が非教育的にとられ易
い點に於て、共に優秀なお話とは云ひ難いのでありま
す。けれども優秀なお話と否らざるお話との兒童に與
へる結果を比較するために、わざと掲げて置くことに
しました。

五、文學博士芳賀矢一先生が御多忙中にも拘らず、本書
のために御懇篤なる御序文を下さいましたのを、深く
感謝いたします。

大正五年五月

著者識す

お話の研究、目次

第一章 緒論……………一頁

- ◎ 兒童とお話との關係——お話の使命
- ◎ 泰西諸國に於ける趨勢——修身教育の資料としてのお話——
お話に對する泰西教育家の意見の缺陷——日本に於ける研
究の不振
- ◎ お話に關して考研すべき諸問題

第二章 お話とは何ぞや……………六

第一節 お話の定義……………六

第二節 お話の種類……………八

目次

○ 第一項 滑稽談の意義と内容……………八

○ 滑稽談の分類

(A) 笑話—伊太利のお話—笑話の特質

(B) 無意義談—日本のお話—無意義談の特質

第二項 童話の意義と内容……………三

○ 童話がお話中の王者たる所以

○ 童話の分類

(A) 興味を中心とするもの

(イ) 内容に興味を求むるもの

(ロ) 形式に興味を求むるもの

(B) 教訓に重きを置くもの

(イ) 單獨形式

(ロ) 對立形式

(ハ) 鼎立形式

○ 第三項 寓話の意義と内容……………二六

○ 寓話と教訓との關係

○ 實例……………イソップ物語より

○ 寓話と童話との差異

性質上の差異

形式上の差異

○ 第四項 傳説の意義と内容……………二九

○ 傳説とは何ぞや

○ 實例……………日本傳説集より

○ 傳説と滑稽談、寓話、童話との差異

○ 傳説と史實との關係の有無

○ 第五項 神話の意義と内容……………三三

○ 神話の説明

○ 實例—古事記、ボリネシヤの物語、北歐神話阿弗利加土

目

次

人の物語等より

○第六項 歴史譚の意義と内容……………四〇

◎歴史譚の説明

◎歴史譚と傳説との關係

○第七項 自然界の物語の意義と内容……………四〇

◎自然界の物語と神話との比較

◎實例

◎自然界の物語の特質

科學的正確

動的要素より來る興味

○第八項 實話の意義と内容……………四六

◎實話の説明

第三章 お話の教育的價值……………四六

第一節 總説……………四六

第二節 各種のお話の教育的價值……………四七

第一項 滑稽談の教育的價值……………四七

◎滑稽談の使命

(A) 愉悅を與ふること

(B) 親切的な諷刺を與ふること

◎ブライアント女史の説と私見との差異

◎滑稽談の本質的使命と隸屬的使命

第二項 童話の教育的價值……………五五

◎チルラー、ユスト、トル、ヒーマツシユ諸氏の童話に對する意見

◎童話の教育的價值

(A) 兒童に深大な歡喜を與ふること

目次

(B) 兒童に教訓を感銘させること
 (C) 兒童に文學的教養を與ふること
 第三項 寓話の教育的價值……………六四
 ◎ 寓話の本質的使命
 ◎ 實例に就きての説明

第四項 傳説の教育的價值……………六七
 ◎ 史的効果の否定——歴史譚との差異
 ◎ 國民的自覺と誇負——白樂天と三河入道寂照との對照
 ◎ 郷土の愛好——歴史譚に缺けたる長所

第五項 神話の教育的價值……………七三
 ◎ 文化民族の神話と未開民族との神話
 ◎ 文化民族の神話の特質——美化と醇化——藝術的效果——美と趣味との宣傳

◎ 未開民族の神話——未開民族と文明民族の兒童との心理的

類似

◎ 未開民族の神話の特質——素朴と單純——兒童に眞正な自己の遊園を與ふること

第六項 歴史譚の教育的價值……………八〇
 ◎ 歴史譚の眞の使命

- (A) 人類の過去の生活の意味を教ふること
- (B) 民族的自覺と血族的感情との喚起
- (C) 個人を感奮させること

◎ 英雄崇拜——ブルタークの「英雄傳」——セオドラス、ガサの名言

第七項 自然界の物語の教育的價值……………八四

- ◎ 自然界の物語の使命
- (A) 自然界に關する智識を與ふ
- (B) 生物の生活と運命との理解

◎理科教授と自然界のお話との差異
第八項 實話の教育的價值……………六

◎事實の有する大なる權威
◎歴史譚傳説の教育的價值を減却する原因
(A)不確實

(B)尙古の性情
◎實話の有する強み

第四章 優秀なるお話……………六

第一節 優秀なるお話とは如何なるもの
なるか……………六

- ◎優秀なお話の採擇と庸劣なお話の避忌
- ◎如何なるお話が優秀なるか
- ◎優秀なお話の有すべき資質

第二節 優秀なるお話の備ふべき條件……………六

第一項 適度の活動性……………六

◎活動性の説明——デフォアの物語とステブンソンの物語との比較研究——兩者の興味の多少と其の理由

◎お話の活動性——「口拍子」中の一話と活動性との關係
第二項 適度の情緒の動き……………一〇五

◎神經と感覺との働き——デフォアの文章の批評——スコットの「アイバンホー」の批評

第三項 適度の空想的要素……………一〇八

◎兒童と空想との關係
◎空想的要素の價值

第四項 繪畫的印象……………一一三

◎繪畫的印象を與ふる條件

目

次

- (A) 單純な要素
- (B) 兒童の屢々直觀せる要素
- (C) 兒童の直觀し熟知せるものより容易に類推し得る要素
- ◎ 是等の要素と兒童の想像力との關係

第五項 適度の變化性……………二四

- ◎ 變化性の價值——夏目漱石氏の高濱虛子氏に與へたる忠言
變化性と興味との關係

- ◎ 時間的關係と因果律との緊密

- ◎ 兒童の愛好するお話の實例——アフガニスタンの童話

第六項 適度の反覆性……………二四

- ◎ 反覆性の説明——その實例

- ◎ 反覆性の喜ばるる事實の心理的解釋——緊張せる意識の快
き弛緩

- ◎ プライアント女史の試みと童話

第五章 優秀なるお話を得る方法……………三二

第一節 總説……………三二

第二節 お話の選擇……………三三

- ◎ 優秀なお話を含む書籍

(A) 和漢の書籍

(B) 印度の書籍

(C) 歐米の書籍

第三節 お話の改作……………三七

第一項 長き物語を短くすること……………三六

- ◎ 如何なる場合に話を短くする乎

(A) 内容が長きに失する場合

(B) 物語が幾個も集つて一の物語をなす場合

◎ お話の分析—構造と内容との分解

◎ 改變の方法

(A) 多くの階段を壓搾して、その數を少くすること

(B) 複雑なる筋を簡明にして、主たる筋と緊切明確なる關係を保たしめること

(C) 二の中心を有するときは、之を二つの話となすか、又は一を取つて他を捨つること

(D) 叙述の糸が二筋になりゐる場合に、そのよりよき一つを選ぶこと

第二項 短き物語を長くすること……………一四一

◎ 寓話の敷衍

◎ 逸話の敷衍

◎ 寓話と逸話の簡潔性—簡潔性と兒童の興味との關係

◎ 活動性と情緒の動きとの賦與—その實例—戰國策と呂氏

春秋との寓話—常山紀談中の逸話

◎ 敷衍のためのお話の分解の必要

第三項 道德上よりする改變……………一五

◎ 古代と現代との道德觀念の差異

◎ 道德觀念の變遷に順應すること

◎ お話改變の實例

第四節 お話の新作……………一六一

◎ 新作に伴ふ困難

◎ 新作を試みるための準備

(A) 兒童心理の研究

(B) 古來の優秀なるお話の玩味

◎ 製作上の心得

- (A) 探るべき条件
- (B) 避くべき条件

第六章 お話の取扱方……………一六

第一節 總説……………一六

- ◎ お話を授くる方法
- ◎ 開發的方法と講話的方法
- ◎ 兩者の優劣

第二節 お話を授くるための豫備……………一六

- ◎ 話者自ら先づお話を玩味すること
 - (A) 積極的方面
 - (B) 消極的方面、暗記の弊害
- ◎ 繪畫實物の用意と板書

- ◎ 兒童の配列
- ◎ 話者の氣分とお話の内容との合致

第三節 お話の話し方……………一六

- ◎ 單純
 - 粉飾的態度の害——單純な態度の説明
- ◎ 直接的
 - 目的への直入——迂餘的態度の害——お話を話す場合に於ける身的補助
- ◎ 戲曲的
 - 戲曲的態度と煽動的態度との區別——生理的、自然的發現としての身振り——説明的身振りと暗示的身振り——後者の尊重
- ◎ その他の條件

- (A) 話者が先づお話の興味に感すべきこと
- (B) お話の中斷を避くべきこと
- (C) 音聲の注意
- (D) 兒童の理解し易き單語及び家庭に於けると同一の口語を用ふること

第四節 各種のお話に要する特別の取扱方と

注意……………一八六

第一項 滑稽談の取扱方と注意……………一八六

◎ 教訓を力説せぬこと

◎ 可笑味を發揮すること

第二項 童話の取扱方と注意……………一八七

◎ 童話の含む教訓の無限なること

◎ 避くべき童話

(A) 慘酷な行爲を強烈に描寫せるもの

(B) 過度の神經的分子を含むもの

(C) 兒童の生活及び倫理感に全然背戾するもの

◎ 形式に興味を求むる童話の話し方

第三項 寓話の取扱方と注意……………一八七

◎ 活動性と情緒の動きとを加味すべきこと

第四項 傳説の取扱方と注意……………一八八

◎ 郷土藝術

◎ 同一の傳説の諸地方に存在せることを知らしめざることを

第五項 神話の取扱方と注意……………一八九

◎ 神話は稍年長の兒童に授くべきこと

◎ 避くべき神話

(A) 性的關係を説く神話

(B) あまりに宗教的な神話

(1)あまりに社會的な神話

第六項 歴史譚の取扱方と注意……………三六

◎歴史教授とお話としての歴史譚との區別

◎演義風に話すべきこと

第七項 自然界の物語の取扱方と注意……………三〇

◎理科教授と自然的のお話との區別

◎なるべく動的に材料を取扱ふこと

第八項 實話の取扱方と注意……………三三

◎實話の強みと弱み

◎弱みに對する注意

第五節 年齢上より見たるお話の取扱方……………三三

第一項 お話の内容及び形式と兒童の年齢との關係……………三四

第二項 お話の種類と兒童の年齢との關係……………三九

第七章 お話集……………三四

滑稽談の部……………三四

(一)鹽の中の泥棒(印度の話)……………三四

(二)肩の上の子供(アツシリアの話)……………三四

(三)驢馬の紛失(フィニシアの話)……………三六

(四)珍妙な蛇(日本の話)……………三五

童話の部……………三五

(一)長吉の餡ン棒(日本の話)……………三五

(二)袋のお金(露西亞の話)……………三五

(三)鴉の黒服(日本アイヌの話)……………三六

(四)西瓜の家(丁抹の話)……………三六

(五)虎の先生(馬來半島の話)……………三七

(六)三人いたずら男(印度の話)……………三六

目

次

(七)火の玉(北亞米利加土人の話)……………三九〇
 (八)象の眼と蚯蚓の眼(亞弗利加土人の話)……………三〇一
 (九)鴨取權兵衛(日本の話)……………三〇五
 (十)換へ玉(日本の話)……………三〇九
 (十一)強情者の失策(羅馬の話)……………三一四
 (十二)遠慮は損(印度の話)……………三二八
 (十三)腹の中の鳥(英國の話)……………三三五
 (十四)借金 of 惡計(亞弗利加土人の話)……………三三九
 (十五)運の悪い男(朝鮮の話)……………三三七
 寓話の部……………三四三
 (一)獅子と馬(希臘の話)……………三四三
 (二)首柳(希臘の話)……………三四五
 (三)待ぼうけ(支那の話)……………三四八
 (四)道化役者と百姓(希臘の話)……………三四九

傳説の部……………三五三
 (一)忠犬ゲレルト(英國の話)……………三五二
 (二)河童釣り(日本の話)……………三五七
 (三)石芋(日本の話)……………三六〇
 (四)ハットー僧正(獨逸の話)……………三六一
 (五)灰の飯(支那の話)……………三六七
 (六)皮膚を脱ぐ男(佛蘭西の話)……………三七二
 神話の部……………三七八
 (一)巨人の手袋(北歐の話)……………三七八
 (二)四季の由來(希臘の話)……………三八三
 (三)バナナと石(亞弗利加土人の話)……………三八六
 (四)黄水仙(希臘の話)……………三九〇
 (五)茶の樹(支那の話)……………三九二



お話の研究

水田 光著

第一章 緒論



毎月の始めに書籍店の店頭に立つものは、幾多の美々しい幼年雑誌や少年雑誌が處狭きまでに其處に列んでゐるのを見てせう。そしてまた幾多の児童達が歡喜と期待とに輝く眼でそれに眺め入つてゐるのを見てせう。是等の雑誌に満載されてゐる「お話」は、實に児童に對する無上の樂園であり、無限の趣味であり、無双の教訓であり、また好適な智識の供給壇であるのであります。彼等の心は「お話」に包まれ、「お話」に教へられ、「お話」によつ

第一章 緒論

て生長すると云つても差支ないほど、「お話」と児童との關係は密接であるのであります。學校教育を受ける年齢に達しないうちには、「お話」は殆んど最大の児童教訓者であります。學校教育を受けるやうになつてからも決して教訓者としての高い位置を失ひません。依然、歡喜の賦與者として、趣味の啓發者として、徳性智力の培養としての偉大な地歩を保持するのであります。

「お話」と云ふものは、児童に對して這般の偉大な感化力を持つてゐるものであります。しかも「お話」に關して周密な研究を試みるものは非常に稀であります。成程泰西諸國では、小學校に於ける修身教育の資料として家庭童話の必要にして缺ぐべからざることが、夙に學者間に唱導せられ、今日では漸く一般教育界の認識するところとなつてゐます。例へばかのチルラ・ロ・ユスト・トロル・ヒーメ・シユ諸氏の如き、或はブライアント・セッドロック兩女史の如き、みな此の方面に關する熱心な研究者であり唱導者であるのであります。

けれども私の考では、是等の人士の主張は、餘りに一面的であると思ひます。彼等は單に童話のみを以て、「お話」を代表させてゐます。

彼等はまた修身教育の資料としてのみ、童話を推讃してゐます。此の二點が私に不満を與へるのであります。

「お話」は決して單に童話ばかりで代表さるべきものではありません。児童が愛好し歡喜するお話は、決して童話に限つたものではありません。勿論後章に於て説くやうに、童話はその擴布の範圍の廣いことに於て、その數の多いことに於て、その教訓の廣汎なことに於て、その興趣の豊饒なことに於て、あらゆる「お話」中の最高位を占めてゐるのは、争はれぬ事實であります。けれども童話が所有してゐない興味、童話が發揮し得ない教育的價值を含んでゐる「お話」が外に澤山あると云ふことも、拒むことの出來ぬ事實であります。そして這般のお話——滑稽談や寓話や、神話傳説等——も、童話と同じやうに、児童に愛好され歡迎される以上は、是等の物語も亦童話と同じく、「児童のお話」として取扱ふべきは、寧ろ當然に過ぎたことであると

思ひます。然るに多くの研究者が單に童話と云ふ一方面に局限して、他の多くのお話を閑却してゐるのは、私の第一に遺憾とするところでありませう。次に童話教育の唱導者達が、「お話の價値を單に修身教育の上へのみ認めようとするのも、餘りに一面的に墮してゐると思ひます。私の考ではお話の使命は決して修身教育に局限されるものではないと思ひます。勿論お話が兒童の徳性の涵養に與つて力あることは、明白な事實であります。それが同時に趣味を啓發し愉悅を賦與する力の偉大なことも、否定し得ない事實であります。そして廣い意味、否、むしろ一層善い意味の教訓と云ふ立場から見れば、愉悅の賦與、趣味の啓發は、徳性の涵養と相依り相俟つて、始めて完全な兒童の心の發達が期し得られると思ふのであります。それ故多くの人士が徳性の涵養と云ふ固くるしい方面のみに眼をつけて、愉悅とか趣味とか云ふ、ふわりとした、ゆとりのある光つた方面を閑却してゐることは、私の第二に遺憾とするところでありませう。

教育研究の周密盛大な泰西諸國でさへも、お話の研究に關しては、まだ

かやうな缺陷があるのでありますから、寺小屋の境地を脱してから、やつと半世紀を経たばかりの我が國の人士が、お話に關して殆んど何等の纏つた研究も試みないのは、寧ろ當然でありませう。けれどもお話が如何に力強く兒童の心を把握し支配してゐるかを少しでも感知してゐるものは、此の方面の研究が一日も早く完成されねばならぬと云ふことを充分了解するに違ひありません。

實際「お話と云ふ世界は、多くの複雑な、貴重な、そして緊切な研究問題を含んだ廣漠な未墾地であります。兒童に心の糧を與へる「お話とは何を指すのか。」「お話の眞の使命は何ぞや。」「お話の各種に特有な教育的價値は如何。」「優秀なお話とは何ぞや。」「優秀なお話を選択する標準は如何。」「在來の書物の中の優秀なお話の數に限がありとすれば、如何にして之を新作すべきか。」「如何にして之を改作すべきか。」「お話の話し方は如何。」「お話の取扱は如何。」「凡そ是等の問題は、盡く兒童を持つてゐる父兄や兒童を教育してゐる教師の一日も早く研究し解決しなくてはならぬ緊急事項であります。私が菲

才を顧みずして、先づ是等の問題に手を着けたのは、具眼の士が續々として此の方面に周到な研究を試みる機運を促したいと云ふ切なる望に出たのであります。

第二章 お話とは何ぞや

第一節 お話の定義

私は此の著作によりて、「お話」に關する多くの大切な問題を研究しようと思ふのであります。即ちお話の意義内容やら、お話の教育上の價値やら、その選擇法、改作法、新作法やら其の取扱方やら、話方に關する心得等を考へて見たいのであります。それで先づ第一に「お話」私の意味してゐる「お話」と云ふものは、どんなものを指してゐるかと思ふことを明にせねばなりません。

これを廣い意味に解釋しますなら、人の口から發する意味のある言葉は

盡くお話と云つても差支へありません。日常の用事を辨する談話でも、それからまた演説でも講演でも、みな廣義のお話であります。けれど私の研究しようと云ふ「お話」は決してそんな廣い意義のものではありません。學校に於て、爐邊に於て、また食卓のほとりに於て、兒童の心情を慰めたり喜ばせたり啓發したりするために、先生や父兄の口から漏れる簡明な、素朴な、そして美しい物語を意味するのであります。一言にして申せば、兒童のための物語と云ふのであります。そして私はこの「兒童のための物語」の中に是非下に示すやうな説話を包含させたいと思ふのであります。

- (A) 滑稽談
- (B) 童話
- (C) 寓話
- (D) 傳説
- (E) 神話
- (F) 歴史譚

(G) 自然界の物語

(H) 實話

今第二節に於て是等の「お話」の意義と内容とを明にして、「お話」に對する理解を完全にしたいと思ひます。

第二節 お話の種類

第一項 滑稽談の意義と内容

私がここに滑稽談と云ひますのは、笑話 (Laughable stories) と、無意義談 (Nonsense stories) とを指すのであります。そして笑話と云ふのは、筋は大變簡短であります、其の中に多量の可笑味を含み、兒童達をどつと噴き出させるやうな滑稽な物語を一括するのであります。例へば伊太利のお話に、或る時大勢の草刈男どもが、仕事において、草原の上にすらりと圓形になつて、脚を投げ出しながら、お互に冗談など言ひ合つてゐました。そのうちに日が暮れかかつて來ましたので、めい／＼起ち上らう

としましたが、あんまり澤山の足がよき／＼とこんがらがつてゐるので、どれが誰の足やら薩張り見分けがつかなくなりました。草刈男どもは吃驚して、「やあ大變だ。乃公の足はどれだらう。」乃公の足もわからぬ、困つたなあ。」と暫くの間は、がや／＼騒いでゐましたが、騒げば騒ぐ程いよ／＼解らなくなりましたので、みんな弱つて了つて、圓形に坐り込んだ儘いよ／＼泣いてゐました。すると一人の旅人が通りかかつて、どうしたと尋ねますと、自分達の足がどれだか解らないので、起ち上ることが出來ないで困つてゐると話しました。旅人は思はずぶつと噴き出しましたが、やがて澄し返つて、

「よし／＼。私が解るやうにしてやる。」

と云つて、持つてゐた杖で、澤山の足のうちの一つを、力任せに撲りますと、忽ち一人の草刈男が、

「あ痛いつ。」

と叫んで、すつくと立ち上りました。旅人はそれを見て、

「どうだ、お前の足が解つたらう。」

と聞きますと、その男は向脛を摩りながら、

「どうも有り難ふ御座います。」

とお禮を云ひました。すると旅人はまた杖を振上げて、草原の上の一本の足を撲りつけました。また一人の草刈男が、

「あ痛いっ。」

と叫んで飛び上りました。旅人は

「さあ。これで二人の足が解つたぞ。」

と云ひながら片端から草の上の足をなぐりましたので、みんながやつと立ち上ることが出来ました。そしてみんな痛さうに顔をしがめながら、丁寧に旅人にお禮を云ひました。

と云ふのがあります。此のお話などは即ち私の所謂笑話の適例であります。此の話を讀んでも解るやうに、笑話は別に高尚な、鹿爪らしい教訓を含んでゐると云ふ譯でなく、ただ其の中を流れる一脈の滑稽趣味に、人の

顔を解かしめようとする小話であります。

次に無意義談と云ふのは、これと云ふ取りとめた意味を含んでゐない、無邪氣な、たはいもない一口噺のやうな小話であります。

昔々三人の男がゐました。一人は盲目で、一人は手無して、一人は啞者でありました。三人が一所になつて道を歩いてゐますと、小さい女の子が河に陥つて苦しんでゐました。すると盲目の男が一番にそれを見付けて、啞の友達に知らせますと、啞の男は大きな聲で、

「やあ大變だ。女の子が溺れてゐる。」

と叫びました。すると手無しの男が突然河の中に飛込んで、両手で女の子を抱え上げましたとき、

と云ふお話の如き、また、

「昔々一人の泥棒がある家に忍び込んだとき。」

「ある家つて、誰の家だい。」

「お前の父親の子の家さ。」

「乃公の父親の子と云つたら、矢つ張り乃公ぢやないか。」

「何んだ。そしてその泥棒は捕つたのかい。」

「うん捕つたよ。ところが其奴の皮膚が素敵に奇妙なんだ。」

「どんな皮膚なんだい。」

「なに嘘の皮さ。」

と云ふ話の如き、いづれも私の所謂無意義談のうちに属するものであります。無意義談と笑話とは形式も内容も著しく類似してゐます。従つて劃然と二者を區別することは困難であります。笑話は滑稽趣味を主眼とし、無意義談は無意味なこと、たはいもないこと其のものを話の核心としてゐるところに、多少の差異があると思ひます。

第二項 童話の意義と内容

童話と云ふのは、西洋で Fairy Tales とか Märchen とか呼ばれてゐるお話であります。我が國で「お伽噺」と云ふ名稱のもとに、色々の幼年・少年少女の

雑誌を賑はしてゐる物語は、すべて之に属させたいと思ふのであります。笑話や無意義談に比べると、話の筋が稍々複雑で、そして教訓的の意味を含んでゐることが多いのであります。我が國に廣く行はれてゐるグリムや、アンダーセンの物語は殆んどすべて此の部に属してゐます。

擴布の範圍の廣いことに於て、その多數に存してゐることに於て、童話は「兒童のためのお話」中に第一流の地歩を占めてゐます。それ故世間で普通に「子供のお話」と云へば、すぐにお伽噺を聯想する位であります。そして又數が多いだけ、それだけ童話の形式には、さまざまの種類があります。それ等の諸形式に關して、精確な智識を得てゐなければ、童話の教育的價値や取扱方を説く場合に理解が困難でありますから、後章の研究に對する豫備智識として、こゝに童話の諸形式を説明して置く必要があります。

私は童話を大別して、

(A) 興味を中心とするもの。

(B) 教訓を中心とするもの。

の二つとしたいと思ひます。今此の二つに就いて考へまするに、先づ
(A)興味を中心とするもの。
は更に分れて、

(イ)内容に興味を求めるもの。

(ロ)形式に興味を求めるもの。
となります。

(イ)内容に興味を求めるもの。

内容に興味を求める童話の中にも種々ありますが、

第一には、内容をなす話の筋が面白く入組んでゐるために、児童の興味を惹く一群の童話があります。我が國の桃太郎の話の如きは其の一例で、桃が河から流れて来る事件、それを割ると中から赤兒が飛出す事件、生長して鬼ヶ島征伐に出立する事件、日本一の黍團子で、犬猿雉等の家臣を得る事件、鬼共と合戦する事件、寶物を引かせて勇ましく凱旋する事件等、

児童にとつては殆んど應接に遑がない程、面白い事件が後から／＼と出て来るのであります。そして其の事件の複雑性と、場面の變化とに興味を惹き起されるのであります。勿論事件が複雑に過ぎ、場面の變化が眼まぐるしくなると、児童の心に一種の壓迫と苦痛とを與へる様になります。桃太郎の童話では、それが適度になつてゐるので、児童が面白く讀んだり聞いたりするのであります。

西洋の童話には、此の種の童話が殊に多いのであります。(若い男が乙女の訓戒を破つたために、乙女が忽然として遠い世界に姿を消すと、若者が其の跡を追うて、あらゆる辛苦と危険とを凌ぎ、種々入組んだ事件を生じた後、遂に乙女を探し出して幸福な生涯に入る物語や、ある王子が花嫁を得て、己が城に連れ歸る途中で、一泊すると、夜半に三羽の鳥が現れて、王子が城に歸り着く迄に、生命にかゝはる程の三個の災難に出合ふことを語り合ひ、それを王子の家臣の一人が聞きつけて、身を挺して順次に其の危険を排除すると、それがために却つて王子の嫌疑を受け、その申し開き

をみると、忽ち石に化して了つたが、王子は家臣の忠節と其の横死とを悲しんで、己が子を殺して、その血を石に塗つて、家臣を生き返へらすと云ふ話等、殆んど枚擧に遑がない程澤山あります。之に反して日本には此の種の童話が大量に少ないのです。一體日本人は淡泊で、簡素で、すつきりした趣味を持つてゐるので、食物でも器具でも繪畫でも、西洋のそれ等に比べると、遙に瀟洒で純朴で簡素であります。這般の國民性が生んだ童話に、筋のすつきりした、簡樸なもの、多いのは自然の理であると思ひます。第二には、話の等が適度の複雑性を有するばかりでなく、話の中に現る役者が幻怪な、自由な超自然的の能力を有してゐるために、兒童の興味を惹く一群の童話があります。此の種の話も西洋に最も多く存してゐます。ある勇敢な不幸な若者を助ける牡牛が、若者のために、自分の左の耳から半巾を出して、それを若者に振らせると、忽ち山海の珍味が現はれ、右の耳から手巾を出して、河の上に投げやると、忽ち長く延びて橋となり、或は若者を乗せて怪物の棲む銅の葉、銀の葉、黄金の葉の不可思議な森を通

り、或は肉身を粉塵せられながらも、生命の水を浴びて元の牡牛に歸り、最後に王子に頼んで、自分の平頭を斬落してもらふや否や、忽ち立派な若者の姿になつたことを説く童話の如きは、其の適例であります。然るに日本には動物が己が首を切落されて、美しい若者に變化する話もありません。(天の稚彦物語には此の事件が現れてゐますが、これは西洋の借物であります)。頭にピンを刺されて乙女が小鳥に變じ、ピンを抜かれて、また元の乙女の姿に復する事件もあります。ある男が巨人の足に縋ると、それがころりと落ちて犬となり、手を掴むと、ぼきりと折れて猫となり、首に抱き付くと、がくりと挽げて猿となり、胴體ばかりで刎ね廻る幻怪な人物もありません。日本の童話には、西洋の童話に見るような、しつこい、幻奇極まる大怪物は現れません。大概は鬼や天狗や狸狐猫等に、變化の役を演じさせる位で済みます。如意寶と云つても、金銀珠玉や米や倉等を打出す、打出の小槌位が大關で、西洋の如意寶のやうに、法外に幻怪な珍寶は見當りません。すべてが簡朴で、奇を弄し過ぎることがありません。これも國民

性の反映に外ならぬと思ひます。

(ロ)形式に興味を求めるもの。
形式に面白味があるお話には、種々ありますが、私は之を大別して次の七種とします。

(1) 反覆形式の童話

これはお話の中に同一の事件が幾度も繰返さるるもの。

(2) 連続形式の童話

これは類似した事件が幾個となく連続するもの。

(3) 堆積形式の童話

これは類似した事件が幾個となく堆積して、話の筋が始めに逆行するもの。

(4) 循環形式の童話

これは多くの類似せる事件が一定の階段を経て、一の事件より他の

事件に移り行く間に、自ら知らずして元の出立點に歸り來るもの。

(5) 漸層形式の童話

これは一の事件より他の事件に推移するごとに、後の事件が前の事件に比して重要な程度を増すもの。

(6) 漸墜形式の童話

これは一の事件より他の事件に移るごとに、後の事件が前の事件に比して、重要な程度を減するもの。

(7) 齟齬形式の童話

これは多くの類似した事件が起るに當つて、前の事件と後の事件とが常に齟齬するもの。

是等の七種のお話の委細の説明と實例とは、お話の取扱方の章に述べつもりでありますから、ここには態と省略して置きます。

(B) 教訓に重きを置くもの。

教訓に重きを置く童話を大別して、單獨形式、對立形式、鼎立形式の三つとします。

(イ) 單獨形式の童話

話中の重要な人物が唯一人であつて、其の人物の行爲及びその行爲の結果に就いて、教訓を説くことを主眼とする童話を總括して、單獨形式の童話と呼ぶことにします。この中には、始めが不幸で後に幸福になる話と、始めが幸福で、後に不幸になる話との二種があります。古今著聞集に載つてゐる「養老の瀧」の物語の如きは前者の適例であります。それから後者の適例としては、我が國に多い長者物語を挙げることが出来ます。(即ち或る長者が貪慾で、奴僕をひどく使廻してゐたが、或年の田植に、日が暮れかかつて、苗を植ゑ盡さぬので、扇で太陽を招くと、太陽があとへ返つたので、その間に苗を植ゑて了ひました。そして乃公の威勢で太陽を呼返したと威張つてゐましたが、翌日になると、長者の廣い田畑がみんな湖水の底

に沈んで、長者は貧乏のどん底に陥りました。と云ふやうなのであります。單獨形式の童話は、我が國にも外國にも澤山あります。話の中に、どんなに澤山の人物が現れても、中心となる人物は一人で、そして其の中心人物の行爲と、その行爲の結果のみを主眼として教訓を説くものは、盡く此の單獨形式の童話の範疇に屬させたいと思ひます。

(ロ) 對立形式の童話

對立形式の童話と云ふのは、童話の中に二人の主なる主人公が現はれて、それが對立して種々の行動をなし、其の行動に對する結果がまた對立してゐる物語を總稱するのであります。即ち一人の主人公が親切であれば、他の主人公は之に對して不親切である。一人が寡慾であれば、他の一人はこれに對して貪慾であり、一人が忠義者であれば、一人は之に反して不忠であります。そして一方では其の親切、寡慾、忠義のために善い結果を得、之に對して他方では、其の不親切、貪慾、不忠のために悪い結果を得ると

云ふ教訓を含ませるのであります。此の形式の物語は東洋西洋共に甚だ豊富であります。我が國にも澤山あります。(例へば宇治拾遺物語卷三に載つてゐる「雀報恩のこと」と云ふ物語の如きは、其の適例であります。

昔一人の子供が、庭に虫を拾つてゐる雀を見て、石を投げつけると、雀に中つて腰の骨を折りました。子供の老母が可哀想に思つて、雀を小桶に入れて親切に介抱し、米や野菜などを食はせて飼つてゐると、程なく丈夫になりました。それ故桶から出して、放してやりますと、さも嬉しそうに飛去りましたが、廿日ばかりして、また飛んで来て、老女の顔を眺めながら、口から瓢の種を一粒落して去りました。老女はそれを植ゑて置くと、やがて芽が出て、大きくなつて瓢が澤山生りました。取下して見ると大變に重いので、不思議に思つて、切開きますと、總ての瓢に白米が溢るる程入つてゐました。それを器に移すと、また瓢が一ぱいになるので、老女は間もなく大金持になりました。隣に住んでゐた不親切な老女が、此の話を知りて、自分も雀を得ようと

思つて、わざと庭に米を撒いて、それを喰べに来た雀の群を目かけて石を投付け、一疋の雀を捕へて飼つて置きました。そして暫くしてから放してやると、十日程経つて瓢の種子を一つ啣へて来て、庭に落しました。大喜びで植ゑて置くと、大きな瓢が七つ八つ生りました。早速桶など用意して、口を切開くや否や、蛇、蜂、蜈蚣、毒蛇等がぞろぞろと瓢の中から現はれて、老女の體に纏付いて、とう／＼刺し殺しました。

即ち此の童話にありては、一方の女が親切であり、他方の女が不親切であります。そして親切な女は幸福を得、不親切な女は災厄を蒙るところに、對立形式が成り立つてゐます。此の物語ばかりでなく、舌切雀や花咲爺なども皆此の種類に屬する童話であります。また我が國にも外國にも多く存してゐる繼母童話の如きも、立派な對立形式であります。何故なら繼母物語では、いつも繼子と實子とを拉し來つて對立させ、繼子は容貌が美しく、親切で勤勉で、優しい人物とし、實子は容貌が醜くて、不親切で怠惰

て、残酷な人物としてあります。そして繼子は其の親切勤勉のために幸福を得、實子は其の不親切怠惰のために災厄を招くと云ふ教訓を含ませるのが、一般の趣向であるからであります。

(六)鼎立形式の童話

三人の主要な人物が現れて、それ／＼異つた傾向を示し、異つた行動をなす一群の童話を總括して、鼎立形式の童話と名づくることにします。一の例を挙げますと、

昔或る所に三人の兄弟がゐました。或時父が三人に少し宛の金を與へて、此金で何か修行して來いと云ひました。三人は各異つた性質を持つてゐました。長男は學問が好きなので、隣國の或る學者の許に行つて修行しました。正直で勤勉であつたので、學者は、指で環を造つて目に當てると。どんな遠方のもので、歴々^{あき}と見ることの出来る魔術を教へました。次男は鍛冶屋の弟子になりました。そして主人を助けて

忠實に働いたので、さまざまの鍛冶の奥儀を教へられました。その中の一は、手でも足でも鐵で造つて、眞實の手足と少しも違はぬ様に動かせる術でありました。三男は商賣が好きなので、隣國の豪商の許に行つて、その徒弟となり、商賣の秘訣を覚えしました。此の男も大變忠實に働いたので、歸るとき主人から莫大な金錢を貰ひました。さて三年経つて、父の許に歸る途中で、三人の兄弟はある宿屋で一所に落合ひました。三人は各々その學んだ術を語り合ひましたが、長男は父の安否を知らうと思つて、指で環を造つて目に當てると、足を碎いて床の中に苦しんでゐる父の姿が、あり／＼と見えしました。大變驚いて三人は晝夜兼行で家に歸りました。碎けた足はとも用に立たぬので、それを切取つて、次男がその代りに鐵の足をくつ附けますと、自由自在に動きます。そして三男の持つて歸つた金で、一家豊に暮しました。此の童話にありては、兄弟三人が父の命に従つて修行するのに、極めて勤勉に、極めて忠實であつたため、稀代の報酬を得て、父の大患を救ひ一

家を豊にすることを得るところに教訓が含まれてゐます。そして三人が各々異つた職業を修得し、三人の異つた技能がそれ／＼用をなすところに、鼎立形式が成り立つてゐるのであります。

前に述べたやうに、童話の数は「お話」の中で最も多数であります。これを分類しますと、大略以上の數種の形式となります。而して此の分類は、後章に於て「お話」の取扱方を説く場合に必要でありますから、特に注意して記憶して置かねばなりません。

第三項 寓話の意義と内容

動植物時としては無生物までもなどを主人公として、彼等を人間のやうに語らせ働かせて、之を讀むもの、之を聞くものの胸に、一の教訓を感銘させる物語が即ち寓話であります。それ故寓話と云ふものは、豫め一の教訓があつて、その教訓を物語の外衣に包んだものであります。教訓と云ふものは、總じて四角四面で、鹿爪らしい、ごつごつしたものでありますか

ら、これを其の儘人に傳へようとしても、その興味と注意とを惹き起すことが出来ません。それでその教訓を一の物語のうちに溶し込んで、柔かく面白く調劑して、たやすく人の腑に落ちるやうにしたのが即ち寓話であります。(一二の例を挙げますと、

或時棕櫚が竹に向つて、

「いかに竹能う聞け。汝程世に弱うて、みもない者はあるまじい。僅の風にも恐れ戦いて靡くばかりぢや。吾は少も志を撓めず、不斷健氣にして居る。」

と云へば、竹はこのことを聞けど、眞實なれば、兎角とんずるに及ばないで、閉口して畏つたが、やがて其の日大きい旋風が吹いて、鳴動して来たが、竹は素から恐を爲いて、首を地に下げ、謙遜つたれば、恙なう起上つた。然るに棕櫚は兼日の利口の如く志を下さず、肘を張つて居たを、何かは怵えう散々に吹き折つて根掘になつて果てた。(文録 舊譯イソップ物語)

この話は植物を主人公として、「高ぶる者は害せられ、従ふ者は却つて他を制するぞ」と云ふ教訓を説いた寓話であります。次に動物を主人公とした寓話の例としては、

野牛の母、草を食ひに野に出るとき、兒共に言置くやうは、

「この穴の戸を内より善う閉ぢて居よ、何と外より呼び叩くと云ふとも、わが聲と又この様に叩かずば、粗忽に開くな。」

と云うて出た。狼、母の野に隙を狙うて來て、母の聲に似せて其の戸を叩いた。野牛の兒共内から聞いて、

「聲は母の聲なれども、戸の叩き様は狼ぞ。」

と云うて、ちつとも開けなんだ。(文録舊譯イソップ物語)

の如きは、其の適例でありまして、「子が親の意見をよく守れば悪いことはない」と云ふ教訓を、物語風に碎いたのであります。

私は先に童話も教訓的意義を含んだものが多いと云ひました。それならば童話と寓話との間には、どれだけの性質上の差異があるかと云ひますと、

童話は總じて興味を中心として、傍ら教訓を吹き込むお話であります。即ち童話では興味と云ふことが第一義で、教訓は第二義であります。之に反して寓話は道德的教訓を核心として、申し譯けに、物語の衣をかぶせたのであります。(苦い薬を飲みよくするために、オブラートで薬を包むやうなものであります。)それで寓話に於ては、教訓が第一義で、興味は第二義となつてゐます。この點が童話と寓話との性質上の差異であります。猶この二つの話は、形式の上からも随分著しく異つてゐます。即ち童話に於ては興味を重んずるために、自ら筋が面白く、長く、複雑になつてゐますが、寓話に於ては、教訓を注入するのが主旨となつてゐるために、童話よりも、ずつと筋が短くて簡素であります。

第四項 傳説の意義と内容

傳説と云ふのは、一定の時代に、一定の場所、一定の主人公がなした面白い行蹟を傳へる物語であります。(例へば、

大和國の矢木と云ふところに、天神山、畝傍山と云つて、二つの山がある。昔辨慶が土を舂に入れて、棒で荷つて此處まで來ると、餘り重かつたと見えて、棒がヤーギと音がして二つに折れた。だから矢木と云ふ名が出来た。其の舂の土が兩方に別れて、天神山と畝傍山が出来た。その時辨慶がひどく勞れて、近くの松に腰を掛けると、松が根元から折れた。此の松を祀つたのが、今の辨慶明神であるそうなる。(日本傳説集)

の如き、または、

出雲國松江の大橋が土橋であつた時分のこと、或日橋が流れて、幾度橋代を建てて見ても、忽ち根こぎに流れて、工事が少しも捗らぬ。すると誰云ふとなく、人柱を立てたがよいと云ふことに話が纏つたが、さて自分から進んで人柱に立たうと云ふものがない。其の時に源助と云ふ者があつて、茲にゐるものの中で、袴の何處かに横繼のあるものを探して、其の者を人柱に立てやうではないか、と云ひ出した。それ

がよいと云ふので、一人づつ改めて見ると、これはしたり、源助の袴だけに横繼があつた。

源助が人柱に立てられて、橋が難なく出来上つた。源助の魂魄は永く橋代を守つて、今に源助柱の名が残つてゐる。(日本傳説集)

以上の二つのお話を讀んだものは、傳説と云ふものが、どんな形式と内容とを持つてゐるかを了解することが出来ると思ひます。従つて滑稽談、童話寓話の三者と傳説との差異も自ら明になると思ひます。即ち前三者では、年代も場所も主人公の氏名も必要な條件となりません。單に昔々ある所に一人の老爺さんがゐましたと云ふ如く、昔々て年代を代表し、ある所にて場所を代表し、一人の老爺さんて主人公を代表さすれば、それで立派な滑稽談や童話や寓話が成り立つのであります。然るに傳説となると、そうは行きません。多くの場合年代も場所も主人公の氏名も明示されてゐます。たとひ是等の三つが悉く明示されないとしても、一つか二つは定つてゐるのが普通であります。そして滑稽談、寓話、童話と違つて、其の物語の内

容は一個の史的事實と信ぜられてゐることが多いのであります。しかし史的事實と信ずるのは、その傳説の語り傳へらるる地方の人士ばかりで、これを廣い見地から見ますと、歴史的事實ではなくて、やはり一の架空談に過ぎないことが多いのであります。ワインスベルグに傳承されてゐる一個の傳説の如きを見れば、それがよく了解されます。即ち

西曆一千百四十年十二月日耳曼王コンラード三世が、ウルテンベルヒのワインスベルグ附近で、ババリアのウルフ四世の軍を打破つて、同市を占領しました。すると城の方から和睦を申し込んで、その條件として、女が運ぶことの出来るだけの品物を城内から持ち出すことを許してくれと云ひます。コンラード王が此の條件を承認すると、間もなく城内の女共が各々自分の夫を背負つて、どや／＼と門外によろめき出ました。王はしまつたと思はれましたが、約條に背くわけに行かぬので、部下の將士と共に唯あきれて眺めてゐるばかりでありました。

此の話は獨逸の詩人で且つ植物學者であつたカミツソ(一七八一—一八

三八の歌謠によつて、不滅の聲譽を博しました。そこでワインスベルヒの市民はよくカミツソの歌謠を持ち出して、婦女の忠實を誇つて、氣焔を吐くのであります。彼等は歌謠に歌はれた通りの事件が、十二世紀にまさしく同市で起つたと信じてゐるのであります。けれども廣い見地から云ひますと、氣の毒ながら、同市の人々の誇りは何の價値もないことになります。何故かと云ひますと、この話は一の作爲した物語で、ワインスベルヒ市以外の都市でも、これと全然同じ事件の話を持つてゐるのであります。かやうに傳説は、その根底に多少の歴史的根據があるとしても、多くは作り物語であります。たゞ表面だけでも史的事實と信ぜられ、そして一定の年代、場所、氏名を備へてゐる點に於て、滑稽談、寓話、童話と異つてゐると云ふことを注意しなくてはなりません。

第五項 神話の意義と内容

神話と云ふのは、一個または數個の神様を中心としたお話、即ち神様の

由來や系統や言行に關する物語を云ふのであります。けれどもこの外にも通常神話と云ふ名稱の下に包括させるお話が澤山あります。即ち私達の祖先や、今生息してゐる野蠻民族未開民族などが、太陽、月、星、風雨地震等の天然物若くは天然現象に關して、生み出した興味ある物語も、神話と云ふ名目のうちに入れるべきものであります。(今二三の例を擧げて神話の性質と内容を明にしますれば、

昔伊邪那岐命と伊邪那美命と云ふ男女二柱の神様が住んでおゐてになりました。或る時伊邪那美命が火の神をお生みになると、腹部に大火傷をお受けになつて、とう／＼お崩になつて黄泉國に下つておしまひになりました。すると伊邪那岐命は其のあとを追つて、自分も黄泉國にお出かけになりました。そして伊邪那美命に對つて、も一度此の世に歸るやうにお頼みになりますと、伊邪那美命はさも残念さうなお顔をなさつて、

「黄泉の國の食物を喰べましたので、人の世には歸れません。」

とお仰いました。それでも頻りとお頼みになるので、

「それでは冥府の王様と相談して参りますから、暫くお待ち下さい。くれ／＼申して置きますが、決して妻の居間をお覗きになつてはいけません。」

とお仰つて一間にお入りになりました。けれども伊邪那岐命はその言葉に背いて、そつとお覗きになりました。すると伊邪那美命は見るも恐ろしい姿に變つて寢ておいでになりましたので、伊邪那岐命は大變に驚いてお逃げ出しになりました。伊邪那美命は大變お怒りになつて、澤山の醜女どもに、伊邪那岐命のあとを追つかけるやうに、お言ひ付けになりました。追手が近くなつたので、命は鬢の櫛を取つて、後にお投げになると、忽ちそれが澤山の笛となりました。醜女共はそれを見て、片端から折つて食べてゐる隙に、どん／＼お逃げになりました。すると今度は澤山の雷神達が追かけて來ましたので、十拳劍を揮り廻して、やつと出雲の國までおいでになりました。さうすると今度は伊

邪那美命が御自身で追かけておいてになつたので、伊邪那岐命は千引の大岩を抱出して、道を塞いでおしまひになりましたので、女神は無念さうなお顔をなさつて、

「妾をお辱しめなすつたから、これから一日に千人の人を殺します。」とお仰ると、男神はすかさず、

「それぢや私わたくしは一日に千五百人の人を生れさすぞ。」

と仰いました。それだから今日でも死ぬる人よりも、生れるものが多いのてあります。(古事記)

これは神様を中心とした神話の例であります(天然現象や天然物を説明するため)に出来た神話を云ひますと、例へば太陽に就いて下の様な話があります。

昔々太陽は大變早く空を走つてゐましたので、女達は折角着物を洗つても、それを乾かす間がありませんでした。困つて男達に相談しますと、二人の勇敢な男が大きな兎の脊に乗つて、東の方に出かけました。

その頃の兎は只今の兎と違つて、體が大變大きかつたので、暫くすると、世界の東の端に來ました。二人は強い綱でわなをこしらへて、其の兩端を掴んで、夜の明けのを待つてゐました。やがて東が白んで太陽がぬつと頭を出しますと、それが甘くわなの中に入りました。二人はすかさず綱の兩端をぐつと締めて、力任せに引張りましたので、太陽は首を締められて、眞赤になつて腕き苦しみます。二人はその弱身につけ込んで、

「これからもつと緩くり歩いて下さい。」

と云ひますと、太陽は苦しくて耐らないので、小さな聲で、

「承知した。緩くり歩くから、早く綱をといてくれ。」

と云ひました。けれども餘り強く綱を引張つたので、どうしても解けません。それで兎が近寄つて、前脚で解かうとすると、太陽の熱で體がじゆつと焼けて小さくなつて了ひました。あつと云つて飛退きまじだが、前脚は既に焼けてゐました。(それで今日でも兎の前脚は後脚よ

り短かいです。そして體が小さくなつても、昔の名残りて今日でも一飛びに遠くまで飛ぶことが出来ます。が網がとけましたので、太陽はお禮を云つて空に昇つて行きました。それから今日のやうに緩く歩くことになりました。

更にまた地震に關しては、(次のやうな話があります。

昔ロキと云ふ神様が惡戯好なので、神様達が怒つて、重い罰を加へようとなさると、ロキは鮭に變つて水の中に潜りました。それで神様達は網をこしらへて、捕へようとなさいますと、水の上に躍り上つて、網を飛越えようとした。それを雷の神様がぐつと掴んで、どうしてもお放しにならぬので、ロキは元の神様の姿にかへりました。それを鐵の鎖で搦めて、地の下の岩の上に押据ゑて、毒蛇を頭の上にお吊しになりました。すると蛇は口から絶えず毒汁を吐きまして、それがロキの顔にかかりますので、ロキは身を跳いて苦しみます。ロキの妻がそれを見兼ねて、鉢を夫の頭の上に捧げて、毒汁をその中に受けま

す。けれども暫くすると、汁が鉢に一杯になりますので、妻はそれを地にかへします。その隙に毒液がロキの顔にかゝりますので、ロキは一生懸命に身を跳きます。その度毎に地震が起るのであります。(北歐神話)

これは北歐に住んでゐた昔の人達が、地震を解釋するために作り出したお話——即ち地震の神話と云つてよいものであります。が昔の人達ばかりでなく、今の人達でも天然現象の解釋を試みて、いろ／＼な神話を生んでゐます。(例へば、現存してゐる阿弗利加土人は電雷について、こんなお話を持つてゐます。

昔地上に親子の山羊がゐました。子山羊は短氣者で、少し氣にくはないことがあります。家を焼いたり、樹を倒したり、人畜を傷けたりして、村の人達を困らせました。でみんな大變困つて、會長に訴へ出ましたので、會長は親子の山羊を天上に追拂ひました。けれども子山羊の亂暴は矢張り止まないで、とき／＼天上を荒し廻ります。今日で

も空に電光が閃くのは、子山羊が家や林を焼くので、雷鳴の轟くのは、それを叱りつける母山羊の聲であります。それでは電光が閃くばかりで、雷鳴が聞えないことがあるのは、どう云ふ譯かと云ふと、それは母山羊が外出して、子山羊の亂暴を叱ることが出来なからであります。

これは即ち土人の幼稚な研究心が、天然現象の解釋のために生み出したお話で、こんなにして生れたお話が私の所謂神話であります。それ故神話と云ふものは、童話や滑稽談のやうな興味中心のお話でもなく、傳説のやうな史的事實と信ぜられるやうなお話でもありません。私達の祖先や、只今の未開民族が彼等の周圍の事物や現象のために、幼稚な研究心を刺戟されて、熱心にその解釋説明を試みた結果として出来た産物であります。それ故話の内容こそ至つて幼稚でありますけれども、云はば彼等の哲學であり科學であるのであります。此の點に於て神話は以上に擧げた滑稽談・童話・寓話・傳説と異つてゐるのであります。

第六項 歴史譚の意義と内容

これは説明するまでもなく、過去に起つた人間の活動の記録であります。私が「お話」として採用しようと思ひますのは、複雑な隱微な過去の社會現象などではなくて、偉れた人々の言行に關する物語であります。

傳説と歴史譚とは一寸似てゐるやうであります。前に云つたやうに傳説は史的事實の要素が僅少若くは皆無で、作爲の分子が多いのであります。之に反して歴史譚は決して作爲の分子を含んでゐません。茲に兩者の差違があります。

第七項 自然界の物語の意義と内容

「自然界の物語」と云つただけでは、私の意味する概念が明瞭ではありません。から、少しく解釋を加へなくてはなりません。

先に「神話」のことを説明しました場合に、太陽・月・星・風雨・地震・雷電等に關す

るお話を神話の中に包括させましたが、これも自然界の物語に相違ありません。それならば是等のお話と、今茲に挙げた第七の「自然界の物語」とは、那邊に區別があるかと云ふ疑問が起ります。私は之に對して次のやうに答へねばなりません。

神話の中に包括されてゐる自然界のお話は、其の内容が科學的で正確でない。地震を説明して、ロキと云ふ邪な神の所爲にしたり、電光と雷鳴とを解釋して、子山羊の亂暴と母山羊の叱聲にしたりすることは、お話としては、いかにも興味が多いのでありますが、決して眞理を傳へた科學的の説明とは云はれません。もつとも斯様なお話を生み出した未開民族そのものは、それで正確に眞理を闡明し得たと信じてゐるに違ひありませんが、文化の進んだ民族の間には、眞理としては、さつぱり通用しません。ただ幼稚な人の心の産物として、私達の感興を牽くばかりであります。

然るに私が「お話」の第七として挙げようと思ふ所謂「自然界のお話」は、全くこの點が異つてゐるのであります。所謂「自然界のお話」は、正確な科學的説

明から成り立つてゐます。それだから決して地震を神様の所爲にしたり、電光と雷鳴を山羊の所爲としたりするとはありません。誰だ聞いても非難することの出来ない眞理が、その内容となつてゐるのです。それ故お話の第七目となる所謂「自然界のお話」に簡明な定義を下しますならば、天然現象の正確な科學的説明よりなる簡易な小供向のお話と云ふべきであらうと思ひます。今理解を明瞭にするために、一、二の例を挙げますれば、鰐は多く熱帯地方の河沼に棲んでゐる水陸兩棲の動物である。そして其の皮はいろ／＼に使はれるので、南洋邊の土人は、彈丸の痕をつけないで生捕する工夫をしてゐます。道具は至つて簡單で、直徑四五分位長さ一尺位の鐵棒一本と、籐竹で拵へた網一條との二品あればよい。鐵棒の眞中に籐竹の網の一端を堅く結着けて、その鐵棒を縦にして、夫か猿か鶏などの脊に縛りつけておく。そして河岸か沼の縁で、遠くに行かぬやうに、あまり強くない繩で緊き留めて置く。そして籐竹の網の他の端は、水邊から二三間のところにある岩か樹に固く結んで置

く。用意が出来ると、人は其の場所を離れて、翌朝までは其處に近寄らぬやうにしてゐる。すると餌を探しに來た鱈は狼が河岸に遊んでゐるのを見付けて、得たり賢しと、身體を水の中に隠して、眼ばかり水の上に出るやうにして、四邊の様子を伺ひながら、狼の方に近寄つて來る。そして間近になると、力を込めた尻尾で不意に狼を一搏に撲ち殺す——鱈は敵と闘ふときには、先づ其の尾で敵を撲つものである——それから狼を一噬して、すぐに鵜呑に腹の中に納めて、得意で泳ぎ去らうとすると、どつこいと籐竹の網が引留める。鱈の齒は鋸のやうだから、網は齒と齒との間に喰入つて、どうしても噛み断るとが出来ぬ。また狼と一所に嚙下された鐵棒には、真中に網を結着けてあるので、鱈が網を引張ると、腹の中て横になる、そして網を強く引張れば引張るほど、鐵棒は腹の中を搔廻す。鱈が苦しくて、腕き廻るうちに、すつかり腹を搔破られて往生する。こんな風で翌朝になつて、人が見廻りに來る頃には、目算通りに鱈の土左衛門が籐竹網に繋がれた儘、

水に浮いてゐると云ふことである。(幼年世界大正四年十月號)
これは動物を主題とした「自然界の話」の一例であります。更に天然現象を主題とし取扱つた「自然界の話」の例を挙げますと、

目耳曼國ハルツ山脈の中にあるブロッチン山の頂に幽靈が現れると云ふ評判があつた。すると今から凡そ百年前に一人の好奇家が幽靈の正體を見届けようと思つて、何回も登山して見たが、どうしても其の實物を見ることが出来なかつた。三十回目の登山に、頂の近くにある小さい宿に泊つてゐるうち、或朝四時頃に頂を逍遙うろたいてゐると、やがて太陽が昇つて來て、南西に當つてゐる向ふの山が薄い霧を隔て、ぼんやり見えるやうになつた。すると驚くべき巨人がその山の頂に現れた。何だらうと思つてゐるうち、風のために帽子を吹き飛ばされたので、體を屈めて、それを拾はうとすると、向ふの山の巨人も同じく體を屈めた。そこで好奇家は成程と合點しました。そして自分の手を舉げると、巨人も手を舉げる。今度は宿の主人を呼んで、二人で立つて

見ると、對ふの山にも二人の巨人が現はれた。そこで好奇家は、いよいよ幽霊の正體を見届けることが出来たと云つて、やつと安心したそ
うである。これには何もむづかしい理窟はない。此方の山の頂にゐる
人の影坊主が光線の工合で、向ふの山の霧と云ふ壁に映つたのである。

(幼年世界大正四年十月號)

以上二つのお話に於ては、少しも科學的正確と云ふことに非難すべき點
がありません。鰐の齒が鋸状をなしてゐることも、餌を鵜呑にすることも、
また影坊主が霧に映じて大きく見えることも、みな正しく確實な説明であ
ります。そしてそれと同時に内容が動的であるため學校の講義で聞く理科
談の乾燥無味に傾き易いのに比べてずっと面白く、ずっと聽者を魅する力
に富んでゐます。この科學的正確と魅力ある動的興味との二つを兼ね備へ
たところに、所謂「自然界のお話」の成立の理由が存してゐるのであります。

第八項 實話の意義と内容

これは説明するまでもないと思ひます。私達の周圍に、日々起つてゐる
世上の人事のうちで、兒童の智育や德育に効果の多いものを一括するので
あります。

以上八種の物語が、私の所謂「兒童のためのお話」の内容と成るのでありま
す。是等の八種の物語は、上に述べたやうに、それ／＼特異の性質と面目
とを備へてゐます故、私達はその點に稠密な注意を拂はねばなりません。
さうでなければ、お話の使命、お話の取扱方、及び話方等を研究する場合
に、いろ／＼の不都合と疑惑と混亂とに陥るのであります。

第三章 お話の教育的價值

第一節 總 說

お話には種々の貴重な教育的價值が含まれてゐます。その中で最も著し
いのは、

- (A) 高尚な愉悅を興ふること。
- (B) 徳性を涵養すること。
- (C) 趣味を啓發すること。
- (D) 智識を豊富にすること。

てあります。けれども各種のお話が盡く此の四つの價値を具備してゐると云ふわけではなくて、お話の種類異なるに従つて、それ／＼特有の教育的効果を發揮するのであります。それ故どうしてもお話の各種に就いて考覈しなくてはなりません。私は次節に於て此の問題を詳かに考へて見たいと思ひます。

第二節 各種のお話の教育的價値

第一項 滑稽談の教育的價値

第一章に述べたやうに、滑稽談とは、滑稽趣味に富んだ、たはいもない小話であります。この種のお話は、大人若くは年長の兒童にとつては、あ

まりに飽氣なく、あまりにたはいもないものであります。従つて彼等に對しては、特別の興趣を呼び起さぬ場合も多いのであります。けれども年少な兒童に對しては、著しい教育的効果があります。一體年少な兒童は無邪氣の權化とも云つてよいので、彼等の心は、あどけない愛と笑とに充ちてゐます。それ故無邪氣な滑稽を生命としてゐる滑稽談は、彼等の心に偉大な感應を興へるのであります。だから名目こそ、*Laughable Stories* とか *Non-sense Stories* とか附いてゐますが、此の意味から云へば、決して無意義なお話ではない。大に有意義なものであります。

それならば、此の種のお話の兒童に興へる効果は、どんなものであるかと云ひますと、*ブライアント* 女史が説いたやうに滑稽が有する緊張弛緩の性質に存してゐるのであります。女史が主張したやうに、笑と云ふものは、それが冷笑とか、嘲笑とかでない限り、極めて人類に有用なものであります。滑稽や諧謔が誘起する笑は、人體のうちに流れてゐる血液の循環を促し、厭な感情や思想に緊張してゐる心を和げます。無邪氣な滑稽は、兒童

に軽い、楽しい驚きを與へて、神經に對する一種の電氣療法のやうな効果を呈するのであります。それ故機嫌よく笑ふと云ふことは、大人にとつても、甚だ望ましいことでありますが、發育盛りの兒童にとつては、殊に大切なものであります。これあるがために兒童の小さな、柔かな、いたゞしい心は、家庭や學校に於ける意識的抑制から逃がれて、暢びりした愉快の境に入り、快活な、ゆつたりした氣分になり得るのであります。そして兒童をこんな笑の愉快の境に誘ふのは、主として滑稽談の放射する魔力であります。食卓の傍、火のほとりに於て、(試みに第七章に擧げたものが足の解らなくなつた話や、肩の上の子供の話をする父兄があつたと思つて御覽なさい) 其處には必ず銀鈴のやうな無邪氣な笑が、兒童の顔に輝き出るに違ひありません。

けれども滑稽談の兒童に對する教育的効果は、決してこれだけではありません。眞の滑稽眞の諧謔のうちには、大きな智慮が含まれてゐます。それ故滑稽談は、柔かな、角の立たぬ、諷刺として、有力な教訓を含んでゐ

ます。(嘗て豊太閤が微行して日本全國を巡ると云ひ出しまして、家來達がどんなに諫めても効がないので、かの才氣潑瀾の滑稽漢會呂利新左衛門に此の由を告げて、智恵を借ることにしました。そこで、新左衛門が主君の前に伺候すると、何か世上に珍らしい事はないかと尋ねられる。新左衛門即ち一の滑稽談を語りて云ふやう、

「珍らかなる事こそ候へ。此頃京の賈人鞍馬山にのぼるとて、山の麓に到るとき、晴れたる天忽ちに暮れて、黄昏の如し。天狗忽然として飛來り、賈人を見て曰く、われ今食に飢ゑたり。汝をとりて喰はんと罵る。其の勢甚だ恐ろし。賈人曰く、われ運盡きて、今日公に遇ひ奉れり。逃ぐるとも遁れ難し。兎も角もなし給ふべし。但し某つねく公の神通を聞き候ひぬ。願くは一目見せ給ふべし。さあらば死すとも恨み候はじ。天狗が曰く、汝が望に任せて、神通を見すべし。先づ大身を見せんと云ふとひとしく。其の長け鞍馬山より高くなる。賈人驚きて、此の上は小身を見候はばやと云へば、忽ち蜘蛛ほどになれり。賈

人掌を開きて、此の上に坐り給へと云へば、天狗やがて飛上る。買人急に口を開けて呑みければ、天狗遂に腹中にて死し候と語る。(廣益俗説辨)

英達の豊公は此の話を聞くと、忽ちその真意を悟つて、「汝まうけ作りて、わが徹行の擧を諷するものなり」と云つて、其の後は廻國の沙汰が止んで了つたさうであります。

即ち曾呂利新左衛門は、一の滑稽談によつて、豊公を天狗に比べ、威勢にまかせて、無暗に天下を徹行すると、どんな不逞奸諂のものがあるか、千金の身に危害を加へるかも知れないと云ふことを諷したのであります。そして諸臣の眞正面からの諫言を納れなかつた豊公も、新左衛門の裏手からの微言に動かされたとすれば、この場合に於ける滑稽談がどんなに有効な教訓力を發揮したかは、自ら明白であります。けれども柔かな、角の立たぬ、親切な忠言諷刺としての滑稽談は、ただ大人に對して有効であるばかりでなく、兒童に對しても等しく價值があります。大きな智慮は、可笑

しなたはいもない話の中にも、滾々として流れ登つてゐます。教壇上の教師にして、若くは家庭に於ける父兄にして、巧みに滑稽談を善用するならば、眞正面から責めたり叱つたり勵ましたりする以上に、教育が兒童の心にしみ込んで、言外の意味を強く感じさせることが出来るものであります。滑稽談の教育的價値の第二は、實に此の點に存してゐるのであります。(それ故ブライアント女史も、「親切な諷刺ほど嚴肅な教師はない」と云つてゐます。

けれども私の考では、ブライアント女史の意見に全然賛同すると云ふ譯には行きません。女史は、滑稽談が有する使命として、

(A) 愉快な笑を與へること。

(B) 親切な諷刺を與ふること。

の二點を擧げ、そして此の二つの効果を同じ程度に本質的なものと考へてゐるやうであります。けれども私の考では、滑稽談の眞の使命は、飽くまで「愉快な笑の賦與者」としての使命であつて、親切な忠告諷刺者としての使

命は、本質的なものでないとしたのであります。即ち女史が此の二つに同一の價値を認めるに反して、私は何處までも、(1)を第一義的なもの、本質的なもの、主たるものとし、(2)を第二義的なもの、副産的なもの、隸屬的なものと見做したのであります。何故ならば苟も滑稽談と云ふ以上は、之を讀んだり聞いたりする兒童に、滑稽の快感を與へるに違ひありません。もし這般の快感を與へないとすれば、話そのものが眞の滑稽談となつてゐない證據であります。即ち滑稽談と呼ばれる以上は、どうしても愉快な可笑味が内在してゐなくてはなりません。それ故私は愉快な笑を與へることが、滑稽談の第一義であり、本質であると主張するのであります。

之に反してあらゆる滑稽談が諷刺を與へるとは云はれません。なる程或種の滑稽談は親切な、善良な忠言諷刺を與へるに違ひありません。けれども他の種のもは、ただたはひもない可笑味を兒童の胸に傳へる以上に、何等の意味も持つてゐないのであります。それで滑稽談を讀んだり聞いたる兒童の心が、少しも諷刺を感じなかつたと云つて、その話を批難す

ることは出来ません。可笑味と共に諷刺を感得すれば猶更いのであります。可笑味ばかり頭に響いて、諷刺の意を感じなかつたとしても、少しも滑稽談たるの價値を減じないのであります。それ故私はブライアント女史の「諷刺」と云ふ分子を滑稽談の本質とすることを拒み、これを第二義的なもの、隸屬的なもの、副産的なものと主張するのであります。

第二項 童話の教育的價値

童話即ちお伽噺は、「お話中の王者であります。興趣に豊かな點から云つても、その中に含まれる教訓の博大な點から云つても、また兒童に愛好されることの深甚な點から云つても、童話は、あらゆる種類のお話の間に覇を稱へるに足るのであります。

それ故かのチャルラー氏が「小學校に於ける修身教育の資料として、童話が必要欠ぐべからざることを、始めて唱導しますと、その他の學者達が翕然として之に呼應し、今や漸く歐洲の教育界一般の認識するところとなつ

たのであります。(「童話教授」の著者 ユスト氏 や、「小學教育の理論及び實際」の著者 トロール氏 や、「小學一年に於ける修身教授」の著者 ヒルメツシユ氏 等が、グリムの童話集の中から、若干の物語を選択して、小學教育の最も適切な教材として提供した如きは、その著しい例證であります。

それならば、童話は如何なる教育的價值を持つてゐるかと思ふに、私は次の三點に存してゐると思ふのであります。

- (A) 兒童に深大な歡喜を與へること。
- (B) 兒童に教訓を感銘させること。
- (C) 兒童に文學的教養を與へること。

(A) 兒童に深大な興味を與へること。

兒童に興味を與へるのは、童話に限つたことではありません。童話以外の七種のお話のみならず、多くの興味を含んでゐるのであります。けれどもその興味の深甚な點から云へば、如何なる種類のお話も、童話に及ぶ

ものはありません。一體お話が兒童に興味と歡喜とを與へるには、

- (イ) 適度の活動性
- (ロ) 適度の複雑性
- (ハ) 適度の反覆性
- (ニ) 適度の空想的事件

を備へてゐなくてはなりません。お話はどれでも此の四個の條件の或るものを持つてゐますが、しかし四つとも完全に具備してゐるものは少ないのであります。滑稽談や寓話は活動性を備へてゐますが、複雑性、反覆性、空想的事件に缺けてゐます。傳説や神話は、活動性、複雑性、空想的事件に富んでゐますが、反覆性に於て缺けるところがあります。それから歴史譚、自然界の物語、實話には、活動性、複雑性が備つてゐても、反覆性と空想的事件とを持つてゐないのであります。

かやうに大概のお話は、兒童に興味を與ふる必須條件の一個若くは二個を缺いてゐます。然るに、童話に於ては、是等の四個の條件が完全に備つ

てゐるのが少くないのであります。それ故童話の兒童に與へる興味と歡喜とは、到底他の種類のお話のそれとは比べることは出來ないのであります。従つて何處の國でも、兒童に最も歡迎される讀物は、いつも童話であります。童話は實に兒童の「歡喜」と「憧憬」の源泉とも云ふべきもので、(「宗教教授」の著者ロイカウフ氏の如きも、

「活潑なる性質を有する兒童にして、小學に入ると共に沈鬱となり、授業に注意する能はざるもの往々あり。教材として童話を用ふるときは、容易に此の患を除き得べし」

と唱へてゐます。が單に(小學校内に於て)さうであるばかりでなく、家庭にありても、野外にありても、隨時隨所に氣高く且つ豐滿な興奮的悅樂を兒童に與へるのは、童話の魔力であります。そして這般の氣高い歡喜は、兒童の活動を促し、且つ健全な保育に導くものであります。

(B) 兒童に教訓を感銘させること。

(「グライアント女史が云つたやうに」) 童話はその荒誕な假面の下に、生氣潑潑たる眞理を藏してゐます。優れた道徳的法則や、人類の日常經驗生活に關する訓戒的眞理が、妖精や天狗等の不可思議事件の底に燦として輝いてゐます。それ故童話を讀んだり聞いたりする兒童は、その事件の發展の奇怪にして興味が多いのに心を惹かれると同時に、道徳的眞理が不知不識の間に、彼等の心の底に深く且つ強い根を張るのであります。かやうにして得た人生に關する經驗は、次第に兒童の内の生活を廣く且深くし、いつの間にか彼等自身の胸の中に、見事な道徳的寶庫を築き立てるのであります。そして自分が、實際ある事件に逢着したとき、其の寶庫に善へてゐる道徳的經驗を基礎として、その事件に道徳的判斷を下すやうになります。かやうにして兒童は、自分の判斷で、惡を避け善に就くことが出来るやうになるのであります。(例へば歐洲の一童話に於いて、常に繼母に苛めらるる繼娘が山中で薪を拾つてゐると、一人の老婦人が現れて、空腹だから食物を呉れと云ひます。彼の女は繼母から貰つた僅かばかりのパンを二つに

割つて、その半分を與へました。老婦人はそれを喰つてから、道を尋ねますと、彼の女は親切に教へてやりました。老婦人は優しく娘の頬を撫でて立去りました。老婦人は妖精で、娘の親切に對する報酬として、口から珠玉が湧くやうに頬を撫でたのです。それで繼娘が歸つて話をする度に、口から珠玉が滾れ出ます。繼母は大變に羨ましく思つて、今度は實の娘を薪取りにやりました。すると例の如く老婦人が現れましたが、此の娘は不親切で、食物を乞はれても與へず、道を聞かれても教へませんでした。で老婦人は怒つて、杖で背を叩いて去りました。妖精に呪はれた此娘が家に歸つて話をしますと、其の度毎に口から蛙が飛出すやうになりました。

此の童話を聞いた兒童が、いかに處世上の教訓を感銘するかは、何人も疑ふことが出来ぬと思ひます。

(C) 兒童に文學的教養を與ふること。

童話が有する第三の教育的價值は、兒童の文學趣味を鑑賞する能力を助

長する點であります。東西洋の童話の發生の徑路と、その内容に通じないものは、稍もすれば童話を輕視して、たはいもないものと考へる傾向があります。が、這般の思想は、その人の童話に對する無智と暗愚とを表すに過ぎません。童話は決して古き世の愚かな、たはいもない物語ではありません。試みに印度の童話集「パンチャタントラ」をひもといたら、その中には優秀な智慮と、香高き藝術的風韻とが、燦然として輝いてゐるのを見出すのであります。更にまた亞刺比亞の古話集「アラビヤ夜話」を繙いて御覽なさい。そこには古來幾多の詩人をして歎賞措く能はざらしめた。荒唐ではあるが、甘美な空想と、芳烈高華な韻致とが、人の眼を眩す程燦き渡つてゐることを知るでありませう。

此の如くして、童話の中には、高尚な文學を玩味する能力を啓發助長するに必要な要素を含んでゐるのであります。多くの優秀な大文學はこの「童話の庭」から生ひ出たものであります。泰西の文學史を一讀したものは、何人と雖も、かの國の文藝の多くが、不可思議の人物と事件とに織り成さ

れた童話に、その萌芽を發してゐることを拒み得ないでせう。歐洲の諸文豪IIゲーテ。シルレル。サツカレイ。ヂツケンヌ等いづれも、その兒童時代に於て、童話にうつつを抜かし、魂を吸ひ込まれて、そこから偉大な心の糧を攝取したのであります。「リヤ王」や「テムベスト」や「十二夜物語」や「ベニス商人」を著した沙翁も、童話の愛好者であつたに相違ありません。何故なら是等の戯曲のうちには、多くの童話が巧みに換骨奪胎されて現はれてゐるからであります。それからまたかのウイリヤム、モリスの如きも、傳説童話の熱心な憧憬者で、その名篇「地上樂園」の中には、多くの童話が、彼の錦心を通じて、めてたく貴き詩篇となつてゐるのであります。

かやうに偉大な文藝の士は、或は不知不識の間に、或は自ら求め自ら意識して、兒童時代に「童話の遊園」から吸收した思想感情を、その作品に織り込まぬ者はないのであります。即ち時としては幼年時代の童話的經驗のあらはれとして、其の作品の中に或る種の童話的主人公の名を織り込む事もあるし、時としては幼年時代に於て、想像を恣にした不可思議な童話中の

人物や事件に關する永い間の聯想が、美しい果實となつて、後年の作品を飾ることもあるし、又時としては、兒童時代に童話の魔力によつて深く穿たれた詩的印象の井戸から、自然に湧き出る理想や觀念を基礎として、偉大な作品を生み出すこともあるのであります。

童話が高尙な文學趣味を養成するに偉大な力を持つてゐることは、以上の例證に徴して明かでありますが、かやうに兒童時代の童話的啓發が、後年の作品となつて外部に現はれて來る場合でなくて、單に各人の高尙なそして健全な文藝鑑賞力を養成する方面のみについて考へて見ても、童話の効果は顯著なものであります。童話は不知不識の間に、兒童の精神内容に優秀な趣味と智慮とを植ゑ付け、高尙な情緒を啓沃し、想像の窓に美しく且つ高雅な窓を明けてくれるのであります。かくの如くして兒童の心の底には、動かし難い藝術上の鑑賞力と、貴ぶべき趣味性とが根を張つて、成人となつた時に心のゆかしさが燦々やうになるのであります。〔ブルターク〕の英雄傳が、兒童の精神を刺戟して、道德上の勇者を輩出させたやうに

一卷のアラビヤ夜話は、幼ない心の想像の翼を鼓させて、數知れぬ文藝上の傑士を生んだのを見ると、私は、「兒童精神生活を著して、童話の教育的價值を高唱したブライアン氏と共に」お話中の王者たる童話に對して嘆美の聲をささげぬわけに行きませぬ。

第三項 寓話の教育的價值

第一章に述べたやうに、寓話は、教訓をお話の外衣に包んだものであります。それ故教訓を説く資料としては、寓話ほど直接的價值のあるものは、外にありません。滑稽談、童話、傳説、神話、歴史譚等にも、それ／＼或る種の教訓を含んでゐることは、争はれぬ事實であります。しかし是等のお話の眞の教育的價值は他に存してゐるので、道德を説く點から云へば、第二義のものであります。之に反して寓話は、その成立の根本の意義が、道德教訓の上に存してゐるので、修身の講義などには、此の上もない好適の資料であります。いな修身の講義と云ふやうな、型に拵つた、鹿爪らし

い固定的な場合でなくて、もつと廣い、もつと自由な意味で、立派な人を作り上げたり、處世上の訓戒を與へたりする場合に、最も有力な効果を發揮するものは、即ちこの寓話に外ならぬのであります。

（教壇上の教師にして、もしくは家庭に於ける父兄にして、「兄弟相和すべきことを教訓する場合を想像して御覽なさい。幼稚な兒童を前に控へて、どんなに談理的に兄弟和合の必要を説いたとしても、彼等の頭には深い感銘を與へることが出来ません。それと云ふのは、大人の住む世界と、彼等の住む世界とが全く異つてゐるからであります。理智的に道德を考へたり説いたりするのは、それは大人の世界でのみ許されることで、幼ない民衆の世界には通用しないのであります。それ故彼等に道德を説くには、彼等の世界に通用する考方や説明法を探らねばなりません。そしてそれは寓話の固有な使命に外ならぬのであります。て兄弟和合の必要を訓戒するにしても、徒らに談理の辯を弄しないで、「イソップ物語中の次の一話を話して聞かした方が、遙に効力があるのであります。

或百姓子を大勢もつたが、その子どもの仲が不和で、動もすれば喧嘩口論をして犇めくに由て、その父何とぞして此等が仲を一味させたいと、色々工めども、爲うずる様も無かつたが、或時兒共一所に集り居たとき、父下人を呼うて、「樹の楚^{すはえ}を數多束ねて持つて來い」と云うて、その束を執つて、數多を一つにして、繩を以て思ふさま堅う巻きたてて、兒共に渡いて、「これを折れ」と云ふ。兒共吾も〜と力を盡いて折つてみれども、少しも叶はなんだ。その時父氣條^{すゑな}どもを乞うて解き、一把づつ面々に渡いたれば、造作も無う折つた。それを見て父の云ふは、「面々もその如く、一人づつの力は弱くとも、互に熟懇し、志を合するに於ては、何とした敵にも、左右無う取拉がることあるまじいぞ」と言終つた。

この物語は、廣く人口に膾炙してゐる毛利元就の遺訓と稱する箭の束の古話を想起させるのでありますが、此の箭の話は、文學博士新村出氏、同瀬川秀雄氏が云はれたやうに、全く後人の附會であつて、元就の遺訓狀を

はじめ、正しい史料には跡方もないことであります。さうして見ますと、外國の寓話が早くから我が國に傳つてゐて、それを何人かが毛利元就の遺訓談として了つたものと思はれます。がそれはどうしてもよいとして、かやうに兄弟和合の必要を説く場合に、早くから譬喩談が使はれてゐるのを見ても、寓話と云ふものが、教訓を説く上に、どんなに偉力があるかが、よく解ると思ひます。

第四項 傳説の教育的價值

後に述べる通り、歴史的故事は

- (1) 或る時代と他の時代との密接な關係を教へ、過去と現在とを結びつけるところに、多くの興味を感じしめる。
 - (2) 民族的自覺や、血族的の感情を喚び起して、善い意味の國民的誇りを強くする。
- と云ふ教育的價值があるのであります。それならば、多くの點に於て歴史

譚に類似してゐる傳説にも、此の二つの價值が内蔵してゐるでせうか。私は第一の價值に就いては「否」と答へ、第二の價值に就いては「然り」と答へたいと思ひます。

(先に傳説の意義を説明した時に述べましたやうに)傳説はたとひ少許の史實的根據を有してゐるとしても、その主要な、そして興味ある部分は盡く一の假説であります。たとへば俵藤太も源頼光も、史上の人物には相違ありませんが、瀬田の橋で大蛇を跨いだり、湖の底の龍宮を音づれて、唾をつけた弓の箭で、三上山の百足を射殺したり、若くは神様から不可思議の酒壺をもらつたり、鬼の首を打落したりする事件——兒童の胸に驚異と歡喜と愉快とを波だたせる是等の事件は、盡く作り物語であります。是等の作り物語を目して、過去の事實となし、一の時代と他の時代の社會的關係を説明する正確な材料として取扱ふことの害ありて益なきことは何人も認むるところであります。

之に反して兒童の胸に強い民族的自覺や愛國心を湧き立たせる點では、

傳説は歴史譚に次ぐだけの教育的効果を持つてゐると思ひます。試みに下の傳説を兒童に傳へたと考へて御覽なさい。

唐の白樂天と云ふ詩人が、日本人の智慧をはからうと思つて、遙々と海を渡つて、日本にやつて來ました。すると住吉大明神がお爺さんの姿となつて、魚を釣つていらつしやいました。白樂天はお爺さんを見ると、船を漕ぎ寄せて、「青苔佩衣懸岩肩。白雲似帶廻山腰」と詠じました。するとお爺さんは、何だそんな拙い詩があるかいと云ふやうな顔をして、「こけ衣きたる岩は寒からで、きの著ぬ山の帯をするかな」と歌ひましたので、白樂天は吃驚して、

「いやしい漁師でさへ、こんなうまい歌をよむやうぢや、中々智慧比べに勝てるものぢやない。」

と云つて、這々の體で引き歸しました。(廣益俗説辨)

それから宇治拾遺物語に出てゐる話に、

昔三河入道寂照と云ふ人が、唐土に渡りますと、天子様は澤山の偉い

お坊様をお集めになつて、

「どうぢや、今日は銘々鉢を飛ばせて、食物を持つて來らせるやうにしろ。」

とお仰いました。鉢を空中に投げ上げて、遠方から食物を持つて來らせると云ふことは、なか／＼むづかしい術で、日本にはまだ其の術が傳つてゐなかつたのであります。それで天子様は、日本からやつて來た寂照を困らせてやらうとお考になつて、態とこんなことをお仰つたのであります。果して寂照は大變困りました。「そんなことは出來ませぬと云へば、自分ばかりではない、日本の耻だと思つて、ひとり心を苦しめてゐますと、外のお坊様達はどん／＼鉢を飛ばせて、

「日本のお坊、どうした／＼。」

と責め立てますので、寂照も今は覺悟をきめて、心の中に日本の神佛を祈つて、

「どうか耻めを受けないやうにして下さい。」

と念じますと、寂照の鉢は忽ち獨樂のやうに廻り始めました。と思ふうちに、空中に躍り上つて、唐土のお坊さん達の鉢よりも早く飛んで、食物を受けて歸つて來ました。それを見て、天子様はじめ、一座のもの、みんな感心して了つて、流石に日本の人は偉いと賞め立てました。

以上二つの傳説は、吉備眞備が耶馬臺の詩を讀んで、支那人を回ました傳説や、蟻通明神の傳説などと同じく、所謂日本人の負けじ魂を發揮した、お國自慢の畑に生長した物語であります。かやうな傳説は、兒童に聞かせたり讀ませたりする物語として、大變興味が多ければ、之を傳へる父兄や教師が少し注意さへすれば、善い意味の國民的誇りを強くする効果が著しいものであります。

最後に傳説は歴史が持つてゐない教育的價值を備へてゐます。それは郷土を愛好する性情を培養することであり、郷土趣味を啓發することであり、歴史上の人物もその郷土の誇りには相違ありませんが、しかし

史上の人物は、多くは日本全體の共有物であり、日本國民の誇りとなつてゐるので、その人を生んだ狭い村里ばかりで獨占的誇負を恣にするわけに行きません。然るに傳說的人物となると、盡くその地方で活動し、その地方で生死してゐるので、その人物に關する誇負は、該地方の人士のみで獨占することが出來ます。他の郷土の人は之に一指を加へることも出來ないものであります、また人物に關する傳説に限らないでも、或る一地方の湖や山岳の發生を説明する傳説などは、其處に住んでゐる人々になつかしい懐古の情と趣味の深い愛着心を起させる偉力を持つてゐます。私達が朝に夕に漫歩する山川草木が、かつて興趣ある傳説に美しく彩られたことを思つたら、私達はその地方に對してどんなに深い趣味を感じるでせう。またどんなにその地方を愛好する氣になるでせう。そして這般の愛好心はやがて郷土の發展を計る努力となるのであります。

第五項 神話の教育的價值

同じく神話と云つても、文化民族の神話と、未開民族の神話とは、兒童に與へる歡喜と興味と効果とを異にするのであります。それ故私達は是等の二つを別にして考へて見る必要があります。

文化民族の神話は概して典雅雄麗であります。勿論その中には、粗野な生地を存してゐる神話もありませんが、全般から云へば著しく彫琢され美化されて、高尚雅麗な姿となつてゐます。殊に希臘羅馬の神話の如きは、古來幾多の有名な詩人——ホーマーやヘジオッドやオージッド等の手に磨きをかけられて、一唱三誦すべき端嚴典麗な藝術品となつてゐます。北歐や獨英等の神話は、希臘羅馬のそれに比べますと、典雅な點では稍劣つてゐますけれども、それでも昔から幾多の詩客伶人の錦心に美化されて、見事な文藝となつてゐます。

それ故文化民族の神話の價値は、主として藝術的效果に存してゐるのであります。彫刻や繪畫が美と趣味とを宣傳すると同様に、文化民族の神話は、兒童に對して美意識と趣味性とを啓發せる驚くべき力を持つてゐるの

であります。だから若し私達が巧みに這般の神話の正當な職分を發揮させるならば、兒童は不知不識の間に、眞正な、そして高尚な美を味ふことが出來て、彼等の心には、豊かな、氣高い興奮的歡喜が湧き出づるのであります。而して一度高尚な美と趣味とを味つたものの精神は、絶えず新しい「美」の飢を感じ、絶えず新らしい「趣味」の渴きを覺えて、それを満足させることに努力躍進し、かくて精神的に大きくなつて行くのであります。獨逸の教育者が早くから此の點に留意して、小學校の課程に多くの神話を含ませてゐるのは、大なる卓見として、私の推服するところであります。

次に未開民族の神話の有する教育的價値は大にこれと異つてゐるのであります。一體文化民族の神話でも、未開民族の神話でも、自然現象に對する解釋から生れたと云ふ點では、その趣を一にしてゐますが(第一章神話の條參照)、前者は年月を経るに従つて、次第に美化され醇化されたるに反して、後者は生れたままの、幼稚な素朴な面目をその儘保存してゐるのであります。一例を擧げると、希臘神話に現る太陽神(Apollo)は、

丈高く力強く、又極めて秀美なり。面の輝けること日光の如く、行く處必ず悦びと楽しみとを齎しぬ。ヂュピター(天の主宰神)これに雪の如き鷲鳥と黄金の輕車とを取らす。之に乗れば、海にも陸にも、欲するが儘に行くを得べし。又七絃の琴と銀の弓とを與ふ。琴を執りて調ふるに、めでたきこと世に儔ひなく、弓に箭番ひて射るに、中らずと云ふことなし。かくてアポロ世に出でければ、人々彼を見んとて、争ひて來り集り、皆嘆美して或は「光の主」と呼び、或は「歌の司」と稱し、また「銀の公子」と呼びはやす。(ポールドキン氏「希臘古譚」)

文化民族の神話に現れた「太陽」は、かやうに高華典麗の風趣を極めてゐます。然るに未開民族の神話に於ては、太陽は私達人間と少しも異つたところがありませぬ。例へば北米土人の神話によると、太陽と月とは兄妹であります。或時兄妹が喧嘩をして、見なる太陽が、妹の月に對つて、以後一所に空に行くことは眞平御免だと云ひました。そこで月は仕方がないので、晝間は雲の底に隠れてゐて、夜になつて兄が見えなくなるのを待つて、

空を渡るやうになつたと云ふことであります。喧嘩をして妹と一所に歩かぬと強ねる位なら、まだいいのでありますが、ポリネシアの神話では、人間に搏られて散々に打擲され、以後は成るだけ緩くりと空を歩くからと詭言を云つて、やつと免されたことさへあります。(第一章神話の條参照)。

かやうに未開民族の神話は、まだ少しも醇化されないうで、素朴な幼稚な生地をその儘露出してゐるのであります。それ故私達は、這般の神話に、縹渺たる藝術的風韻を味ふことは出来ません。美と趣味との高い香をかぐことも、固より不可能であります。けれども未開民族の神話は、文化民族のそれが持つてゐない特別の使命を有してゐるのであります。その使命と云ふのは、これを聞いたたり之を讀んだりする兒童に對して、「真正な自己の遊園を與ふること」であります。

文化民族の神話は典雅華麗の秀什ではありますが、兒童の世界とは餘りかけ離れてゐます。それはその筈であります。是等の神話は、文雅な詩人の手に美化され醇化された藝術品であるから、高尚な美には富んでゐて

も、素朴幼稚と云ふ風趣からは、大變遠ざかつてゐます。それ故幼稚な、單純な兒童は、之を美しいとは思つても、何となく自己に同化し難い感じがするのであります。之を花に譬へたら、さまざまの技巧を凝した花壇のやうなもので、兒童は之を眺めて、その美しさに恍惚とはなるものの、それを自分の花園として、自由に摘んだり、むしつたりする心安さを感じることは出来ないであります。

然るに未開民族の神話には、兒童の心を惹きつけねば止まぬ親和力が含まれてゐます。それはどう云ふ原因から起るか云ふに、未開民族の大人の心と、文明國の兒童の心とが、丁度同じ程度の活動をしてゐるからであります。未開民族では、大人でも至つて幼稚な心を持つてゐます。彼等は自分の周圍にあるものは、何でも生きてゐると思つてゐます。風に揺めく樹でも、地を鑿る河泉でも、自分と同じやうな生命、思想、感情を持つてゐると信じてゐます。彼等にとつては、單に動く云ふことだけで、生命のあると云ふ證據になるのであります。それ故嘗て觀光の客となつて、東

京に滞在してゐた臺灣の土人は、自動車が発して街路を疾驅してゐるのを見て、尨大な怪犬と信じて疑はなかつたのであります。

然るに文明國でも、兒童の心的活動は全く之と同一であります。兒童の思想は、「動くものは即ち生きてゐるもの」と云ふことを何等の狐疑なくして許容してゐます。いな動かないものにまでも、自分の有する思想や感情を、平氣で賦與してゐるのであります。先頃讀賣新聞に連載されてゐた野川彌生女史の「二人の小さいヴァガボンド」と云ふ小説には、この事實に關する最もよい例證が記されてゐます。即ち小さいヴァガボンドの一人なる邦ちやんは、木の葉が微風にそよぐのを見て、自分を招いてゐるものと信じ切つて、自分も小さい手で「お出で」をして之に應ずるのであります。また夏の夕風がさつと吹いて來て、庭の樹々がざわ／＼と鳴るのを聞く度に「樹い樹いが歌つてゐる」と呼ぶのも、邦ちやんでありました。喰ひかけの饅頭の片を、自分の耳の傍に持つて來て、ちつと物音を聞くやうな眼付をしなから、「饅頭が、い、ちいと云つてゐる」と喝破したのも、また邦ちやんでありま

した。

かやうに、未開民族の大人と、文化民族の兒童とは、肉體の世界では遠くかけ隔つてゐるにもかゝはず、心の世界では、全く同じところに住んでゐるのであります。未開民族の心が生み出した神話は、文化民族の兒童が日常抱いてゐる思想感情と寸分の違ひのないものを含んでゐます。かくて兒童は未開民族の物語に、「眞正な自己の反映を見出すのであります。兒童は這般の物語に、自分の信仰、自分の感情が、そつくりその儘の姿で描き出されてゐるのを見て、どんなに心安すい親しさを感ずるでせう。彼等は歡喜の聲をあげて、此の眞正な自己の遊園にかけ込みます、そして何等の遠慮も羞恥もなく、自由にのんびりと、物語の花を我物顔にむしつたり手折つたりするのであります。

未開民族の物語が兒童に與へる此の大なる歡喜に關しては、私は數度の經驗をもつてゐます。或る夏の夕象の眼は何故に大きくて、蚯蚓は何故に眼を持たぬかを説明した阿弗利加土人の神話を話したとき、私の周圍の兒

童は一齊に眼をあげて私の顔を見詰めました。その眼には、我が國の幼年少年の諸雜誌に載つてゐる「文明國の大人の作爲したお伽噺が今迄與へることの出来なかつた、燃ゆるやうな歡喜と悅樂と好奇心の閃きが、美しく輝いてゐました。私はこの一の經驗だけからでも、次の二つのことを主張する立派な理由を持つてゐると思ひます。

(A) 未開民族の神話は、兒童に眞正な自己の歡樂地を與へる。

(B) 兒童の讀物としては、大人の作爲した物語よりも、未開民族の持つてゐる物語の方が遙かに優秀である。

第六項 歴史譚の教育的價值

歴史的物語の教育的價值は、主として過去を通じて、私達の姿を見るところに存してゐます。更に委しく考へますと、

第一は、歴史譚は人類の過去の生活の意味を私達に教へます。人類背景の觀念を私達に與へます。そして過去の生活の中に、現在の生活の意義を

讀んで、事の成敗のよつて來るところや、正邪の應報のいかに大きく且つ正しく行はれてゐるかを悟らせるのであります。それから或る時代と他の時の間に存してゐる、密接で、そして窮りなき關係を教へるのも、歴史的物語の力でありませう。それ故優秀な歴史的の「話」は、兒童の胸中に、過去の出來事に關する觀念を活躍させるばかりでなく、更に過去と現在とを結びつけるところに、多大の興味と教訓とを感得させるものであります。神功皇后の三韓征伐と、豊太閤の征韓と、明治初年の征韓論の騒ぎを讀んだものには、明治四十三年の日韓併合が、どんなに深甚な興味と、深大な感慨とを與へることとせう。そのかみの朝廷の衰微を聞いたものには、今年の高高壯大な御即位式が、どんなに足利時代や戰國時代と、大正時代との對照關係に深甚な感慨と教訓とを感得するでせう。そしてこれ等はみな歴史譚によつて、過去の生活を知つたものばかりが、味ふことの出來る豊滿な教訓ではありますまいか。

第二に、歴史譚は不知不識の間に、民族的自覺や、血族的感情を喚び起

し、善い意味に於ける國民的誇矜を強くするものであります。

殊に我が國の歴史は、他のあらゆる國々の歴史に比して、一種特別な地歩を占めてゐます。源を遡たる神代に發して、二千有餘年の間連綿として續いて來た皇統は、世界の何處を探しても、決して見出すことの出來ぬのであります。革命篡奪などの厭はしい血に汚れた歴史を有する國々の間に、神ながらの神聖な、金甌無缺な國體を樹立し、君臣一體となつて、國威を發揚してゐる我が日本は、實に世界無比の見事な、壯嚴な歴史を有してゐると云はねばなりません。それ故歴史的物語が兒童に與へる教育的價値は、我が國に於て最も立派に發揮されるのであります。また發揮するやうに努めなくてはならぬのであります。そうすれば眞正な愛國心、善い意味の國民的誇負が、すく／＼と健かな芽を吹くのは、疑ふことの出來ぬ事實だと思ひます。

第三には、歴史譚——就中過去に於けるある個人の言行についての物語が、兒童の個性に對して大なる教育的價値を有してゐるのであります。

健全な兒童の心には、早くから英雄崇拜と英雄模倣との萌芽が生動してゐます。そしてこれを巧みに善導し啓發するやうに努めると、教育上極めて有益な効果が收められるのであります。それならばその誘導啓發の手段としては、如何なる方法が一番効力があるかと云ふに、忠信廉信勇斷忍耐その他さまざまの讚歎すべき行爲をした過去の人の「お話」、若くはそれを自叙傳體に書き綴つた「お話を、兒童の耳目に觸れさせるに勝つた道はありません。實際這般の「お話」が兒童の頭に響く強さは、殆んど意料の外にあると云つてもよい位であります。

希臘のプルタークの大著「英雄傳」の如きは、エマーソンが之をオリムピアの大饗宴に比べた程、人類にとつて滋味の多いものであります。それ故この書物の眞味に喰入つたもの間からは、澤山の大なる立志家、大なる經世家、大なる英雄が生まれました。ナポレオンの如きは即ちこの歴史的物語に育て上げられた英傑の一人であります。「英雄傳」は生ひ立ち行く人々とつて、かやうに偉大な教育的價値を持つてゐるのでありますから、セオ

ドラス、ガサと云ふ大學者の如きは、

「若し不幸にして、天下一切の書籍みな消滅し了るべくして、其中の只一書だけ保存を許さるとせば、先生は何れの書をば取らうとせらるるか。」

と問はれたとき、言下に、

「それブルタークの英雄傳其の物である。かの書一部を遺し留むれば、千萬卷の書籍は、悉く其の中に之が拔萃を有するであらう。かの書こそ、其の一冊を以て、他の千萬冊に匹敵するものである。」

と答へたと云ふことであります。勿論ガサの返答の如きは、餘り矯激に馳せてゐる嫌がありますが、しかしこれを見ても、すぐれた人物のお話がどれ程若い人の心を動かし、彼等の小さい胸にどれ程強い渴仰憧憬の念を起させるかが解るのであります。

第七項 自然界の物語の教育的價值

自然界の物語が有する教育的價值は、智的及び情的の二方面から考へねばなりません。

智的方面から云へば、自然界の物語は、兒童に自然其のものを理解させるに頗る有力であります。兒童は此の種の物語に興味を感じて、之を傾聴してゐる間に、不知不識の裡に、動物の性質習慣や植物の生長の法則、特徴などに關する知識を豊富にするのであります。

(けれども私の所謂「自然界の物語」によつて、自然に關する智識を得ると云ふことは、小學校に於ける理科教授が、科學的事實の修得を深くするのは、少し意義を異にしてゐるのであります。理科教授に於ては、兒童に科學的智識を與へ科學に對する興味を鼓吹する點が重大視されてゐますが、「お話」としての自然界の物語に於ては、科學的智識の修得は、寧ろ第二義の教育的價值と思ふのであります。

それならば「お話」としての自然界の物語の教育的價值の第一義は何であるかと云ふに、私達人類以外の生物の生活と運命とに對する了解同情の念を、

兒童の心に生長發育させる點であります。

一體私達は日々自分の生活に營々として、日もこれ足らずと云ふ有様であります。従つて私達は自己以外の生活を実際に理解し玩味する機會に接することが極めて少いのであります。多くの人は、自己の門地職業家族等の關係によつて、生活上の經驗範圍を限定されてゐます。一步進んだ人々になると、這般の限定に拘束されないで、廣く人類の生活や運命を理解することに力めてゐるやうであります。しかし是等の人々でも、人類以外の生物の生活と運命とに關しては、殆んど無關心の態度を執つてゐるものが多いのであります。然るに幸なことには、兒童の心には、人類以外の生物に對して多くの興味を感じてゐます。いな彼等にとりては、人類とその他の生物との間に、劃然たる區別がないのであります。先に云つたやうに(第三章第五項第三節參照)兒童は、すべてを自己と同一なものとし、之に自己と同様な思想感情を與へてゐます。彼等にとつては、木の葉も歌つたり手招きしたりするのであります。饅頭の一片すらも「おいしい」と囁いてゐる

のであります。(兒童達はかやうに人類と人類以外のものとを全然同一視してゐるので、動植物の生活や行動は、自分達のそれ等と同一程度の興味を彼等に與へるのであります。従つて彼等は動植物の生活と運命とを知りたると云ふ希望が活潑に動いてゐます。それだから私達は、兒童の心に内蔵する此の傾向を善導啓發して、人類と異つた生活状態に、兒童の眼を注がせる風を助長するやうに努めねばなりません。このことは同情に豊かな「完全な人」を造り上げるに最も必要なことであります。そして私の所謂「自然界の物語はこの點に偉力を發揮するのであります。

(自然界の物語の上乗なるものは、人類以外の内的生活を語つて、兒童の胸に優しく美しい同情の念を惹起さねば止まぬ力を持つてゐます。話が「ある處に一匹の兎がゐました」と語り出づるとき、兎の子は自己と同じく一個の兒童であること云ふ事實が、先づ兒童の心を動かします。次には將に生ぜんとする新らしい兎の世界に對する興味が、自ら彼等の胸中に起り始めます。かくて兒童達は、「お話」の進展するにつれて、小さき胸を一喜一憂に躍

らして行くのであります。兎が温かい柔かい草の上に住んでゐる事實を聞いては、幼い心に兎の生活のいかに心地よかるべきかを想ひ、覗ひ寄る蛇のために嚙下されんとする事實に進み来りては、眼を睨りてその運命を危ぶみ、やがて兎の母の駆来つて、蛇を追退くるに到つて、やつと歡喜の情に胸を落付けるのであります。かやうにして兒童は不知不識の間に、自己と種屬を異にしてゐるものの生活や運命や情調のうちに、自己を投入し盡すやうになります。而してこれ即ち自己以外の廣い生物の世界に對する理解と同情との、優しく美はしい發露を促す道に外ならぬのであります。

第八項 實話の教育的價值

楠正成が千早の城に立籠つたとき、方々に高札を立てて、一藝一能に秀でたものを召し抱へると云ふ旨を言觸しました。すると四方から大勢のものが集つて来て、それ／＼自分の才能を申立てました。その中に一人の泣男がゐて、どんな場合にでも自由自在に泣くことも出来れば、

他人を泣かすことも出来ると申しました。正成は之を聞いて、早速召し抱へることにしました。老臣の湯淺入道がそれを聞き付けて、泣男などと召抱へても、物の用には立ちますまいと、正成を諫めましたが、正成はたゞ笑ふばかりで、取合ひませんでした。すると一日入道は泣男を呼び出して、

「その方は人を泣かすことに妙を得てゐるそうだが、申すことに偽はあるまいな。」

と云ひますと、泣男は「その通りです。」と答へました。すると入道は大きな聲で、

「では此の入道を泣かして見ろ。それが叶はぬとあれば、偽を申し立てたによつて、其の方の素首を打落すぞ、もし泣かせることが出来たら褒美に此の刀を取らせる。」

と云ひながら、ぎら／＼した眼で睨付けました。泣男は承知しましたと云つて、さまざまの哀深い昔物語を語りますと、一座のものはみんな

な眼を濕しました。が入道ばかりは、物語の了る毎に、大口開けてから／＼と笑ひ出して、

「何んだ、少しも悲しくはないぢやないか、さあ約束ぢや。入道を泣かすことが出来ないによつて、其の方の首を貫ふぞ。其の方の言葉に鎌倉訛があるは、察するところ北條方の間諜まはしものに相違あるまい。さあ覺悟しろ。」

と怒鳴りながら、大刀の柄に手をかけますと泣男はそれを押し止めて、「今は何をお隠し致しませう。某は北條の家來に相違ありません。が某がこれのお城に参りましたに就ては、深い仔細が御座ります。と申すは、某の父酒の上の口論から、朋輩の手にかかつて、敢ない最期、某無念骨髓に達し、如何にもして仇を報いたいものと存じてはゐましたが、何を申すにも對手は武藝に勝れた男、とても某如きもの手に合はぬと存じましたによつて、僅かの藝能を申立てて、當館に住込みましたのも、偏に正成公の力を借りて、仇を報いたい念

願からで御座ります。でも入道様をお泣かせ申すことが出来ないによつて、御手打の今となつては、日頃の念願も水の泡、どうか一生のお願には、入道様某に代つて、父の仇をお返し下されば、墓場の陰にて此上なく嬉しく存じます。」

と語りますと、流石の入道も覺えずほろほろと涙を滾しました。すると泣男は忽ちから／＼と笑ひ出して、

「只今のも、ほんの作り物語で御座ります。でも入道様がお泣きになつた上は、お約束のお刀を頂戴致しまする。」

と云ひましたので、入道もしぶ／＼刀を興へました。

以上はよく講談師の口から聞く物語でありますが、私は泣男の機智と入道の剛樸との對照に興味を覺える外に、作り物語と實話との人に與へる感動の相違を示す話として、更に多くの興趣を感ずるのであります。最初泣男がさまざまの作り物語を話したときには、きよろりとして、別に悲しいとも哀れとも思はなかつた湯淺入道が、泣男自身の身の上話（これも作

り話であつたとしても、入道その人は事實談と思ひ込んでゐたのであります。を聞く段になつて、感極つて涙を流したところに、實話の大きな感化力が嚴として存してゐることを認めぬわけに行きません。

また今日法曹界に雄飛して居らるゝ某法學博士は、或る訴訟事件のことから、しみじみと人權の尊重すべきことを感じて、身を辯護士界に投ずるやうになられたたのことであります。聰明な博士は早くから書物の上なり、理論なりに於て、人權の尊ぶべきことを知つてゐられたことは勿論でありませう。しかも博士を動して、身を法曹界に投ずるに至らせた程の強い感動は、書物や理論から來ないで、實際に逢着した一個の訴訟事件であつたと云ふことは、事實が如何に偉大な感化力を持つてゐるかを語る好個の例證であると思ひます。

事實の力は實際偉大なものであります。幾百の理論も、事實の前には首を俛れねばなりません。幾千の疑惑も、事實の光を浴びては、立ろに氷解せぬわけには行きません。事實は大なる權威であります。活きた教訓であ

ります。論より證據と云ひ、「百聞一見に如かず」と云ふのも、或る意味よりすれば、事實の力を讃へた讚美歌であります。

(先に述べたやうに) 歴史譚傳説は、兒童を感奮興起させる偉大な力を持つてゐますが、その力はさまざまの事情のために減殺される傾向があります。

先づ第一に時間の關係であります。歴史譚や傳説に現るる主人公は、現存してゐる人でなくて、過去の人であります。私達が直接見ようとしても見ることの出來ぬ人があります。それ故其の人の物語を聞く兒童の心には、何となく一種の不確實がつき纏つてゐます。勿論その物語を作り物語とは思つてゐない。飽くまで事實として受け入れてゐるには相違ありませんが、それでも自身で直觀することが出來ないので、たとひ無意識にせよ、心の底には、果して然るかと思ふやうな感じが潜在して、冥々のうちに歴史譚や傳説の感化力を弱めてゐるのであります。

第二には、人の心に内存する尙古癖であります。人間と云ふものは妙な

もので、多くの場合に於て、今を卑しとし、古を尊しとする傾向があります。(釋迦孔子基督ソクラテスは固より世界の四聖とも云ふべき大人物であります。けれども其のお弟子や後世の崇拜者の曲筆舞文によつて、大きな後光を脊負ふやうになつたのであります。況んやそれ以下の人物に至つては、時代のお蔭できらびやかな箔の付いたのが少くないのであります)こんな風で歴史上の人物は、多くの場合實價以上に評價されるやうになるのであります。(中には林田清風のやうに、

來て見れば案外低し富士の山

釋迦も孔子もかくやあるらん

と喝破する達識の士もないではありませんが、全體から云へば)どうしても尙古の感懐に動かされるのが、人間の常で、老人達が、口癖のやうに「乃公の若いときには」と傲語するのを見ても、尙古癖がいかに深い根柢を持つてゐるかは明白であります。かやうな傾向は兒童の頭にも染み込んで、古の人と云ふと、何となく及び難いやうな、一種の優越を感じさせるのであ

ります。この優越感が、冥々の裡に歴史譚や傳説の教育的効果を減殺してゐるのであります。

即ち父兄や教師の口から歴史譚や傳説を聞く兒童達は、その物語に興味と興奮とを感じて、自分達も亦かかる人物のすぐれた行爲に倣ひたいと云ふ情熱を起すと共に、「でもそんな偉いことは、昔の人だから出来たのだ。自分達には及びさうにもない。」と云ふやうな、不安な、覺束ない觀念に壓し潰されさうになる傾向がある。また時としては、「そんなことは昔の人だから出来たのだ。今のものにはそんなことは出来ぬ。」と云ふやうな、低級な自己満足に安心して、敢て先人を模しようとする努力を試みぬ傾向も生れるのであります。

以上は歴史譚、傳説の教育的効果を弱める事情であります。實話には此の事情を伴はぬと云ふ點から見ても、前二者に優つてゐるのであります。實話は何處までも實話であります。其の中には虚偽がない。あやふやな點がない。そして其の主人公は、聽者と時代を同じくしてゐる人間である。

年月の魔力に大きな影法師を脊負つた過去の人でなくて、自分達が日常見聞することの出来る普通の人であります。それ故児童は安心して其の話に耳を傾けることが出来ます。「及び難い人」と云ふやうな壓迫感や優越感に幼ない心を窘ませることがなくて、「彼も人なり、吾も人なり」と云ふ、なだらかな、張のある感興を以て、其の話を味了することが出来ます。従つて實話は児童を感奮させて道徳的向上の途に勇進せしむる偉力を持つてゐます。

第四章 優秀なるお話

第一節 優秀なるお話とは如何なるものか

私は既にお話とは何であるかと云ふことを説明し、進んで其の使命と教育的價值とを論じました。それ故本章に於ては、當然お話そのものの實質に關する研究を試みねばならぬ順序となりました。

等しくお話と云つても、實質の上から見ると、大變な差異があります。

その中には優秀なお話もあれば、庸劣にして採るに足らぬお話もあります。私達は庸劣なものを捨てて、優秀な物語を採擇しなくてはなりません。それならばどんなお話が優秀なもので、どんなお話が庸劣なものでありませうか。二者を識別するには、何等かの標準がなくてはなりません。而してその標準を定めるには、當然お話の眞の使命と云ふことを顧みる必要があります。

私は第三章に於て、お話の眞の使命を説きて、

- (A) 児童に高尚な愉快を與ふること。
- (B) 児童の徳性を涵養すること。
- (C) 児童の趣味性を啓發すること。
- (D) 智識を豊富にすること。

の四者であると云ひました。それ故優秀なお話と云ふのは、この四個の使命を完全に遂ぐることの出来るものでなくてはなりません。同時に庸劣なお話とは、是等の使命を果すことの出来ないものを云ふのであります。そ

れならば、どんな性質を帯びたお話が、是等の使命を完ふすることが出来るかと云ふに先づ第一に児童をして興味と歡喜とを以てお話に傾聽させねばなりません。どんな有益なお話でも、児童が聞くことを厭ふならば、そのお話の含む教育的價値を發揮することが出来ません。それなら、如何なるお話が児童に歡迎されるかと云ふに私は次のやうな條件を備へたものであると信じます。

(A) 内容上の條件

(イ) 適度の活動性

(ロ) 適度の情緒の働き

(ハ) 適度の空想的要素

(ニ) 繪畫的印象

(B) 形式上の條件

(イ) 適度の變化性

(ロ) 適度の反覆性

今次に項を分ちて一々説明を加へます。

第二節 優秀なるお話の備ふべき條件

第一項 適度の活動性

私が茲に活動性と云ふのは、動作アクションを意味するのであります。お話の中に現るる人物(人類にせよ、その他の生物にせよ)の活動を意味するのであります。

此の活動性の有無によつて、物語の興趣に増減があるのは、拒むべからざる事實であります。今例を舉げて説明しますなら、デフォーの小説の一節に下のやうな文章があります。

此の間暴風雨は益々強くなつた。其後いくたびも遭遇したものに比べては、否其二三日あとで遭遇したものに比べては、何でもないが、何しろこれ迄海の上へ乗り出した事のない私には、波が大變高かつた。だから是しきの波でも、水夫になりたてで斯う云ふ事には一切無經驗

の私には應へた。私は浪が寄せる度に、今度は吞まれて仕舞ふだらうと思ふ。船が浪の底に落る度に、もう上がれまいと考へる。此の心配の間にも、もし此度の航海に神の恵みで萬一命が助かつたら、再び乾いた土の上を踏むことが出来たなら、すぐ様父の許へ歸つて、命のある限りは決して足を船の中へ入れまいと、幾度も決心し幾度も誓つた。これがデフォーの描いた暴風雨の光景であります。けれども漱石氏が言つて居られる通りに、暴風雨の記述とは受け取りにくい程憫れなものであります。役人がお上に報告書でも書いたやうな、通り一遍の記事で、ただ暴風雨が起つたのだと、デフォーから聞かされるだけで、物凄く感じも何も起りません。従つて、主人公のクルーソーが此の暴風雨に遭遇しても、し此度の航海に神の恵みで萬一命が助かつたら、すぐ様父の許へ歸つて、命のある限りは決して足を船の中へ入れまいと誓言する場面が少しも活きて來ないのであります。デフォーにして若し讀者の感興を動かすつもりならば、是非ともクルーソーの誓言が活きて來る程度に、暴風雨を物凄く寫

し出して置かねばなりません。それをしないで、無神経な無感覺な筆で、何等の活動的記述もなく、無遠慮にどん／＼書きなぐつて行つたから、讀者の興味を動かすことが出来なかつたのであります。之れに反して動作が興味を喚び起す例證としては、同じくスタブソンの記述に下のやうながあります。

短艇へ下りて見ると、親船で考へたよりも、事が餘程六づかしい。船は見上げる程頭の上にある。あるかと思ふと急に揺り落ちて來る。錨で留められながら、横に傾いたり、どつと沈んだり、危ない事夥しい。自分は詰らぬ事をしたと考へ出した。カトリオナはとても下りられやしない。自分一人でヘルゴエトの岸へ上げられる許りである。報酬と云つたらゼームス、モアに逢へる位のものである。然しこれは女の勇氣を勘定に入れない考であつた。女は自分が何の躊躇もなく内實は兎に角飛び下りる様子を見てゐたのである。無論たつた一人て飛下りた男に負ける了見はなかつた。女は船側に立ち上がつて桅綱に捕ま

つた。風が裳裾に吹き込んだので、下りるのが益々危ない。都ては憚かる程に靴下が見えた。一分の猶豫もなかつた。止め様としても止める事が出来ぬ位である。自分は他の側に立つて両手を擴げた。折から船は揺り落ちて来る。船頭は劔呑な所迄我とわが短艇をよびき寄せる。カトリオナは其時空に飛んだ。自分は幸に下から女を受けた。傍にゐた漁夫が支へて呉れたので、漸く踏みこたへた。女は荒い息遣をして、しつかり自分に嚙り付いた。

漱石氏が云はれる通りに、此の叙述は生きてゐます。鋭い神経が働いてゐます。デフォアの文章の乾燥で、報告的で、無感覺なのとは、まるで比較になりません。それ故讀んでゐる人も鋭く神経を刺戟されて、思はずはら／＼するやうな氣になるのであります。けれども此の一段が讀者の感興をそそるのは、單に書き方が神経的感興的に鋭敏であると思ふだけの原因から来るのではなくて、更に他に大なる理由があると思ひます。即ち此の叙述が含む動作——複雑な、そして感覺的な動作が、強く且つ鋭く讀者の

胸をそそるからであると思ひます。船が揺り上げ揺り下してゐる。女が風に煽られて危く船の上に身を保つてゐる。その女が身を躍らして空に飛ぶ。女を受けた男が女と共に覺えずよろめく。それを傍にゐた漁夫が危く支へると云ふ具合に、さまざまの動作が連續して讀者の眼に展開してゐます。クルーソーがただ船の中におつとしてゐて、浪が寄せる度に今度は吞まれて仕舞ふだらうと心配したり、もし此度の船で助かつたら、すぐ様父の許へ歸つて、命のある限りは足を船の中へ入れまいと誓つたりする記事の動作に缺乏してゐるのは、まるで違つてゐます。そして其處で感興の強弱が生じて來るのであります。

かやうな譯で優秀な話の一條件としては、是非とも話中の人物が相當の活動をしないでなりません。演藝に於ても、役者が舞臺の上に靜かな態度ばかり採つてゐては、觀客に興味を與へることが出来ないやうに、話に於ても、人物の動作が缺乏してゐると、兒童に歡喜を與へることが出来ません。それ故芝居に於て、科白ばかり多くて、仕草の少ないことを忌

むと同じく、お話に於ても、獨白や對話の分子に富んで、動作の分子に乏しいのは、決して優秀なお話とは云へません。例を擧げて説明しますなら、徳川時代に出來た落語集「口拍子」と云ふ本に、下のやうな話が載つてゐます。猫を貰つたから強い名を付ようと思ふが、何とつけたら好からう。虎とつけてやれ、虎より龍とつけてやれ、そんなら龍を乗せて歩くもんだから、雲とつけよう。それより風とつけてやれ。いやそれより風をとめるもんだから、障子とつけよう。それより障子を嚙るによつて鼠とつけてやれ。そんならいつそ猫で置う。

此の話は猫と出立して猫に復歸する循環形式で、江戸時代特有の簡潔な二人の對話で、洒落のめしたところに、多大の興趣があります。けれども這般の洗練した洒落の味は、大人には面白く味へますが、兒童に對しては全く不可解の世界であります。二人の人物が突立つたまま、洒落のめす對話で全篇が出來てゐる此の物語には、人物の動作と云ふものが全然缺けてゐますから、兒童は之を聞いても、之を讀んでも、何等の興味も感じませ

ん。兒童をして此の話に歡聲を擧げさせようとするには、是非とも之に適度の活動性を加味しなくてはなりません。貰つた猫に虎と命名して得意であら、友達が來て、虎より龍が強いと云つたとか、若くは龍を命名して得意で隣家に連れて行つたら、龍より風が強いぢやないかと問はされたとか云ふ風に、相當の動作を話中に持ち込まなければ、お話に活躍的生彩が湧いて來ないのであります。

第二項 適度の情緒の働き

お話の内容に適度の情緒が動いてゐると云ふことも、優秀なお話たるべき一の必要條件であります。情緒の發露は物語に生命の焰を吹き込むもので、物語中の人物が脈々たる生動の氣を帯ぶるのは、全く情緒が動いてゐるからであります。もし物語に情緒が流露してゐないとしたら、話中の人物は死灰や枯木のやうな、生氣のない、冷いものになつて了ひます。従つて這般の物語は讀者に何等の感興も與ふることが出來ないのであります。

今實例を擧げて之を證しますなら、

余が最初出合つた敵兵は十六人より多くはなかつたが、往來に小さな柵塞を設けて、怠りなく警戒を加へてゐる。余は龍騎兵に命じて、馬から下りて柵塞を開かせた。彼等が勇敢に其の命令を遂行して居る間、十六の敵兵は二回小銃の一齊射撃を彼等に浴せたが、終に柵内を通過して、四分の一哩許り彼方の大木戸の邊へ退却した。余等は第一の柵を乗取つて、次第に大木戸まで攻め寄せたが、此處には二百の統卒が堅めて居る。余は彼等を攻撃する準備をすると共に、一方王に使を派して、敵が優勢であるから、歩兵の増援隊を遣はされたと願つた。

我龍騎兵は突撃した。敵も猛烈なる銃火を以て抵抗したが、王の送つた二百の増援隊が到着する前に、此の地點から彼等を追ひ拂つた。

これは夏目漱石氏がデフォーの騎兵の記録中から引用された戦争の叙述であります。此の物語を讀むと、いかにも大きな活動が行はれてゐます。突撃したり、鐵砲を打ち放つたり、進軍したり、退却したりして、人々な

かく忙しく動いてゐます。けれども私達は、この文章を讀んでも少しも戦争らしい氣分が起りません。何だか戦争があつたぞと云ふ一片の報告書を読むやうて、實戦の光景や、戦つてゐる人の活躍する姿などは、少しも眼に浮んで來ません。それは何故かと云ふに、物語の内容に何等の神經も感覺も働いてゐないからであります。人物に生動の氣を與へる情緒が丸で動いてゐないからであります。デフォーの物語が無味乾燥だ、面白くないと云ふ批評を受けるのは、全く情緒の働きを缺いてゐるからであります。之に反してスコットの「アイバンホー」と云ふ傳奇物語中の下の一節を讀んで御覽なさい。

サクソンの軍勢は早や森より現れて、四方八方から城壁の下に押寄せた。城内の喧囂は益々烈しくなつた。物具の打合ふ響、防ぐ者、寄する者の叫喚の聲は、アイバンホーをして、安穩に身を横へて居らしめなかつた。彼はまるで軍馬のやうに逸りに逸つて、身の創をも忘れて、一筋に軍中に駈入らうと焦つた。

すると彼の病に侍するレベッカと云ふ猶太乙女が楯に身を蔽うて、その蔭から下を見おろして戦の光景を説きます。その一節に云ふ、

「見えまする、大將と覺しきは、黒の鎧の騎士で御座ります。寄手は斧で柵を打破り、堡の下に寄せます。あれ／＼黒い兜の羽が軍勢の中から高く動きます。あら打破りました。聞入します。大將は片腕に二十人力もあるかのやうに戦はれます。レヂナールが落ちました。あら黒衣の騎士は、大斧を振りかざして、搦手の門前に寄せられました。雷のやうな響が聞えませう。門の扉を斧で打壊されます。防手は頭上に雨霰と石火を浴せかけますけれど、石つぶても思はれぬやうで御座ります。」

これはスコットの原文其の儘ではありません。原文は非常に長いので、その要略を撮るばかりであります。それでも此の物語がいかにも興趣に富んでゐるかは、充分に窺ひ知ることが出来ます。夏目漱石氏の如きは此の一節に關して、

「少時スコットの『アイバンホー』を読んで、レベッカの楯を翳して壁間より戦状をアイバンホーに報ずるの章に至つて、張目寐ぬる能はず。燈を挑げて天明に達せるは今猶明かに記憶にあり。(文學論四九三頁)と推讀して居られます。それならば、此の一節がどうしてそんなに興趣に富んでゐるか云ふに、いろ／＼外に原因もありませうが、その中に情緒が潑刺として動いてゐると云ふことは、確かに其の重なる原因の一であります。痛手のために戦に加はることの出来ぬアイバンホーの惨ましい焦心、黒い兜の騎士の大斧の閃き、門を砕く雷のやうな響——およそ是等の記述には、鋭い神経と強い感覺と、深い情緒とが鳴り渡つてゐます。それ故讀者も、自己の神経と感覺と情緒とを鋭く強く且つ深く刺戟されぬわけに行きません。かくして無限の興趣が旺盛として讀者の胸に湧いて來るのであります。」

デフォアの記述も、スコットの記述も、同じく戦争の物語であります。前者が乾燥無味で、何等の感興も惹かぬのに反して、後者が甚しく讀者を

動かすのを見ては、何人も情緒の働きと、物語の興趣との間の密接な關係を否定することは出来ずまい。而してこの一事は大人の讀む文學に於て眞であるばかりでなく、兒童が讀んだり聞いたりするお話に於ても同様に眞であります。

第三項 適度の空想的要素

兒童は偉大な空想家であります。彼等④想像はいかにも自由で、いかにも大膽であります。大人は今迄經過して來た生活上の實經驗によつて、いたましくも空想の翼を縛られて了つてゐますが、這般の實際的經驗に乏しい兒童にありては、殆んど如何なることでも可能であるのであります。

此の點から云つて、兒童は偉大な Dreamer (夢見る人)であります。彼等の想像の裡に於ては蛙でも蚯蚓でも人語を發してよいのであります。熊や馬が忽然として王子に變化しても、毫も差支へないのであります。一介の仕立屋が巨人を打ちのめす程の勇力を持つてゐても、決して不都合ではない

のであります。實際兒童にとりては、空想は大事な生命の糧であります。彼等にとりては、空想も空想ではありません。現實であります。嚴然として存立する現實と信じて疑はぬのであります。拇指程の小人でも、雲を突くやうな巨人でも、妖精でも惡魔でも、兒童の眼から見ると、立派に現實性を備へてゐるのであります。

空想はかやうに力強く兒童の心の底に根を張つてゐますから、彼等が空想的分子に富んだお話を喜ぶのは當然であります。いな彼等はお話中の空想的分子に接して、はじめて「自己の眞の心的反映」をそこに見出し得ると云つても差支へないのであります。それ故もしお話から、全然空想的分子を除去したなら、その話は、兒童にとつて興味索然たるものになることが多いのであります。「兒童精神生活」の著者ブライン氏が、

「兒童の空想は、甚しき空想的の童話にあらざれば、興味を感ずること能はず。此の種の童話は、兒童の空想の滋養にして、此の食物を與へざるときは、却つて有害なる結果を齎すことあり。」

と云つたのは、稍々嬌激に失してゐるとしても、その言中には、争ふべからざる眞理を含んでゐます。私が優秀なお話の一條件として、適度の空想的分子を要求するのは、這般の要求が全く兒童の天性に基くからであります。

第四項 繪畫的印象

優秀なお話の備ふべき條件の他の一は、兒童の想像力に對して明瞭な繪畫的印象を興ふることにあります。それならば如何なる事件や事物が、明瞭な繪畫的印象を興へるかと云ひますと、

- (A)それが單純な要素から成立してゐる場合。
- (B)それが兒童の屢々直觀した要素から成立してゐる場合。
- (C)それが兒童の直觀し熟知したのから容易に類推することの出来る要素から成立してゐる場合。

であります。話中の各事件や各事物が、這般の要素からなつてゐますと、

兒童は、何等の心の躓きも、何等の理解の困難もなくして、自由に活潑に其の想像力を働かすことが出来るのであります。従つて自分の力で、自分の頭の中に、明確な繪畫を描き出すことが出来るのであります。そして此のことは、兒童にとりて非常に愉快なものであります。何故かと云ふに、嘗て經驗した材料を元として、その上に自身で新しい世界を組立てると云ふことは、何人にとつても極めて興味のものであります。殊に兒童は先に云つたやうに、豊富な想像力を持つてゐますので、既知の材料を基礎として、その上に自分の意に適した面白い空中樓閣を描出すことが、極めて自由で且つ容易であります。お話の要素が彼等の熟知せる事物から成り立つてゐるとき、彼等が多大の興味を覚えるのは、全くこれが爲めであります。之に反して若し未だ曾て經驗しないもの——見たことも聞いたこともない事物が、お話の中に續出すると、兒童はその事物の理解に頭腦を費すに忙しくて、「お話の興へる興味を味ふだけのゆとり」がないやうになるのであります。

かやうな理由からして私は、各事件が兒童に明瞭な繪畫的印象を與ふるもの——即ち兒童の直觀した事物から成立してゐることを、優秀なお話の備ふべき條件の一つに數へるのであります。

第五項 適度の變化性

優秀なお話の資質の一としては、其の物語の中に、絶えず或る事件、若しくは或る事物が現はれることも數へねばなりません。言葉を換へて云へば、お話の各段落が常に新鮮な出來事を含んでゐなければなりません。長きに亘る、くどくどしい説明や、同一光景の長い描寫等を含むものは、決してお話の上乗なものではないのであります。

この事に關しては、嘗てかう云ふ興味ある事件がありました。かの俳人にして且つ小説家なる高濱虚子氏が、「俳諧師」と云ふ小説を書いてゐたとき、小説中の一人物が錢湯に行つた一段を、數回に亘つて長々しく描寫しました。すると夏目漱石氏が、虚子氏に手紙を書いて、そんなに一所ひとところに低徊し

ては困るぢやないかと、云つてやつたそうであります。大人の讀む文學でさへ、緊要ならぬ低徊は禁物です。まして兒童は物に倦み易く勞れ易い故その文學たるお話には、絶対に停滯を避けねばなりません。従つてお話の中に含まれる各事件は、常に多少の變化曲折が頻々現はれねばなりません。一の事件が長く續いて、新しい變化がいつまでも現れなければ、兒童の興味と注意とは、忽ちお話から逸し去るのであります。それ故兒童に眞實歡喜を與へるお話——即ち優秀なお話には、兒童の頭腦を混亂せしめざる程度の事件の變化を含んでゐなければならぬこととなります。けれどもそれと同時に各々の事件が離れ、になつてゐてはよくないのであります。どんなに變化しても、どんなに曲折しても、各事件の間には、時間的關係や原因結果の關係上、いつも緊密な纏りと、「脈絡」を保つてゐなくてはなりません。

何故かと云ふに、兒童の心が同一狀態を永く持續することが出來ないと、複雑な思索力とに缺けてゐるからであります。原因たる一の事件があ

つて、それが間もなく一の結果の事件を産み出すやうになつてゐれば、大に兒童の興味を惹きますが、若し原因と結果との間に、多くの時間と複雑な關係とが入つて來ますと、兒童の心は、その關係を辿り、その時間を待つ苦痛に壓迫されて、お話から興味を感受することが出來ないやうになります。私の經驗によると、次のお話は兒童に愛好された物語の一つであります。そして彼等に愛好される原因は、疑もなく此の話が持つてゐる變化性に存してゐます。

四五六（アフガニスタンの話）

四五六は仁王様のやうな大男で、仁王様に負けないやうな赤つ面で、肩にも兩腕にも大きな力瘤が隆々として盛り上つてゐます。そして大きな石を投げ出したり、馬を宙に吊し上げたり、亂暴ばかりしてゐました。近所のもものは四五六の高慢ちきな顔を見ては憎がつてゐましたが、うつかりしたことを云つて、丸太のやうな腕つ節で撲り倒されてもしたら大變だと、無理なことを云はれても、おつと我慢をしてゐま

した。

四五六は相手がなくて、思ふ通りに大力を振り廻すことが出來ません。いい相手はゐないかと、ぶら／＼歩いて隣村までやつて來ると、雜木林の中に一人の男が大きな斧を振り上げては撃ち下ろしてゐました。脊が高く、體が岩丈で如何にも強さうですから、此奴を一番からかつて腕つ節の強い所を見せてやらうと思ひました。で四五六はつか／＼と其の脊後に歩み寄つて、

「おい大男君。」

と呼び掛けました。樹を伐つてゐた男は一寸後を向いて四五六の顔を眺めました。何とも返事をしないで、また斧を振り上げました。これではならぬと、四五六はわざと大きな横柄な聲で、

「おい大男君、呼んでるぢやないか。」

と云ひました。すると其の男はやつと口を開いて、

「何だ、突然に大男君なんて呼ぶ奴があるから。」

「さう怒るない。お前さんは大分力が強さうだね。」
「それがどうした。」

と何處までも大男君はむつつりしてゐます。

「まあさう怒らずに乃公の言ふことを聞いてくれ、實はお前さんが力が強さうなので、一番腕つ節を比べようと思ふんだい。乃公も少々腕に覚えがあるからね。」

「フン、力比べに來たと云ふのかい、まあそんなことは止さつしや

50」

と四五六の云ふことを刎ねつけて、大男君は再び斧をふり翳しました。短氣者の四五六は忽ち嚇となつて、大男の袂を掴みながら、

「何だと、いやに高くとまつてゐるぢやないか。そんなことは力比べした後で云つてもらひたい。」

「ぢやどうしても力比べすると云ふんだね。」

「さうとも當然よ。」

「ぢや來い。」

「うん、今直ぐ行くよ。」

と云つて、四五六は突然肌を脱いで、節くれだつた腕を叩いて、今にも大男に飛び付かうとしてゐます。すると大男も斧を樹に立てかけて、肌を脱いで力足を踏んで、

「さあ來い。」

と云ひました。四五六はやゝと唸つて大男に組み付くが早いか、満身の力を兩腕に込めて對手を振り倒さうとしましたが、大男は平氣なものです。團扇のやうな大きな掌を開いて、四五六の頭をむづと掴んで宙に吊し上げようとしませす。四五六は顔を真赤にして腕きましたが、どうしても敵ひません。世にも偉い奴がゐるものだと思ひながら、猶も組み付いてゐると、其處へ雲突くやうな大男の羊飼が通りかゝりました。羊飼は二人が一生懸命に相撲つてゐるのを見付けて、腰を屈めて上の方からじつと二人を眺めながら、

「やあ珍らしいものがあ。何だいこりや、小つぼけな男共が噛み合つてゐるやうだ。」

と云ひながら、指先で二人の頭を摘んで掌の中に拾ひ上げました。二人は大男の掌の中央で力足を踏みしめながら、夢中になつて揉み合つてゐます。すると羊飼は大きな手でむづと二人の腰の周りを掴んで、二人が脚をびく／＼動かして苦しんでゐるのを平気で人形を眺めるやうに横にしたり逆にしたり、嘗めてみたりして嬉しがつてゐましたが、やがて袂から風呂敷を取出して、二人をボンと其の中に投り出して、ぐる／＼と包んで了ひました。そして、

「いいものを見付けた。子供のお土産に持つて行くんだ。」

と云ひながら、片手に其の風呂敷を提げて、大得意で家に歸つて行きます。途中でも時々風呂敷の隅から覗き込んで、

「二人共確りしろよ。やあ大きな奴が小さい奴を撲つたぞ。うん小さい奴もなか／＼威勢がいいや。大きい奴の腕に噛みついたぞ。確り

／＼。

など云ひながら歩いてゐました。するとやがて空中に一羽の大鷲が現れて來ました。鷲は大きな翼を擴げてくるり／＼空を舞ひながら、獲物を探してゐますと、地面に何やら小さいものが動いてゐるのが見つけかりました。好い獲物だと思つて、すうと空を這つて下の方へやつて來ます。羊飼は空が急に騒つて來たので、雲でも出たのかと見上げる途端に、舞ひ降りた鷲は鋭い爪にむづと羊飼の頭を攫んで再び青空に舞ひ上りました。羊飼は風呂敷を片手にぶら下げた儘、兩方の脚をびく／＼打振つて段々と空中に昇つて行きました。

さうする中に流石の鷲も獲物が重くなつて來ました。けれども折角手に入れた獲物を捨てるのも惜しいと云ふので、暫くの間は我慢してゐましたが、いよ／＼堪へきれなくなつたので、爪をくわつと開いて羊飼を放しましたが、どうしたのか羊飼は爪から離れません。それも其の筈です。羊飼はこんな高い所から落ちたら體が微塵になると思つ

て、一生懸命に明いてゐる片手で鷺の脚に縫り付いてゐたのです。鷺はどうかして羊飼を振り落さうとしますが、羊飼の方ではいよ／＼強く搦みつくばかりです。その中に鷺はへ／＼に弱り切つて、羊飼と一所に段々と下の方へ落ちて來ました。

下の方では一人のお姫様が高い御殿の欄干に凭れて、氣持の好い風に吹かれながら、青空を眺めていらつしやると、上の方から小さい黒いものが落ちて來るので、何だらうと不思議に思つて、大きく眼を見張つて其の方ばかり眺めていらつしやる中に急に大きな聲を揚げて、

「婆や、大變だ。早く來ておくれよ。」

と仰いました。階下したにゐたお姫様の乳母は何事だらうと上つて來ました。お姫様は左の眼からほろ／＼と涙を流して、

「左の眼に何か入つたやうだよ。」

と頻りに眼を靡つていらつしやいます。乳母は急いでお姫様の左の眼の隙を裏返しにして見詰めてゐましたが、やがて、

「お姫様、こんな小さい塵埃ほこりが入つてゐましたよ。」

と云つて、鷺と羊飼と二人の男を包んだ風呂敷とを、お姫様の眼の中から摘み出して、指の先に載せて差し出しました。お姫様はぢつとそれを見つめて、

「ほんとに小さい塵埃ほこりだね。こんな小さいものでも眼に入ると、矢張り痛むのね。」

と云つて、ぶつと大きな息を吹きかけました。すると鷺も羊飼も四五六も大男も、散り散りに吹き飛ばされて、暫く空中に舞ひあがつてゐましたが、やがてばら／＼と地面に落ちて來ました。四五六は大きな石でひどく脇腹を打つて、うんと云つた儘氣絶してしまひました。暫くしてやつと息を吹き返して、そつと頭を上げて四邊あたりを見廻しましたが、鷺も羊飼も、相撲の相手の男も見付かりませんでした。四五六は静に起き上つて、のこ／＼と自分の村へ歸つて行きました。その後も四五六は力自慢をしたとお思ひになりますか。

第六項 適當の反覆性

優秀なお話の備ふべき一條件として、私はまた反覆性を挙げたいと思ふのであります。即ちお話の中に、或る程度の事件の反覆を含んでゐることを要求したいと思ふのであります。例へば三人の兄弟が怪物退治に出かけるとして、先づ最も年上の兄が、其の途中で或る行動をしたために、怪物のために喰ひ殺されたとします。すると其の次の兄も、之と同様な行動をして、同じく怪物のために喰殺されるとなると、ここに事件の反覆が生じます。そして次に一番末の弟に至つて、二人の兄と反對の行動をなして、遂に怪物を退治すると云ふやうに、お話が發展すべきであります。桃太郎のお話を見ても、犬、猿、雉に順々に日本一の黍園子を與へるところに、巧妙な反覆性が現れてゐます。そして這般の反覆が兒童の心に大なる歡喜を與へるのであります。

お話中に現るる反覆性が、何故に兒童に興味を與へるかと云ふに、それ

は頗る複雑な心理的現象に存してゐるので、一々之を解剖して、明瞭な説明を與へるのは困難であります。けれども一二の明白な原因を述べらば、第一に其の事件の進行をば、未前に會得したと云ふ意識が、兒童の心にくすぐるやうな快感を與へることあります。例へば前に挙げた三人兄弟怪物退治のお話に於て、兒童は先づ最も年長の兄が、或る行動をなして、それがために怪物に喰殺されたと聞きます。すると次に話が、第二の兄が怪物退治に出發したと語り出すや否や、兒童は、その男の未來の運命に關して、自身で一種の結果を作り出します。即ち此の男も第一の兄と同一の行動をなして、怪物のために喰殺されるだらう。」とか、若くは、「此の男は兄と違つて、見事に怪物を退治するだらう。」とか、二者何れか一の解釋を下してゐます。そしてお話が果して自分の解釋と一致するか否かに對して、心中大に期待してゐるのであります。此の期待が、不知不識の間に兒童の意識に大なる緊張を與へます。そのうちに話の筋が進んで來て、いよいよ第二の兄の運命が自分の解釋した通りになつたと知ると同時に、意識の緊

張が快くつけ始めるので、くすぐられるやうな快感を覚えるのであります。またその男の運命が、全く兒童の豫期に反した場合には、「意外」と云ふ念に打たれても、とに角問題が解決したために、緊張した意識が快くとけるのは、前の場合と同じでありますから、此の場合にもまた快感が起るのであります。

かう云ふ譯で、お話中の事件の反覆は、兒童に大なる興味を興へるものであります。それ故私は、優秀なお話の一條件として這般の反覆性を數へたのであります。而して此の反覆性が如何に兒童に興味を興へるか、グライアント女史が多くの兒童について聞合せた結果下のお話が兒童の最も愛好するお話三つの中の随一であつたと云ふことでも分明であります。

或る日一人のお婆さんがお部屋を掃除してゐると、五十錢銀貨を見付けました。女は大變喜んで、それを持つて、市場に行つて小さなく一匹の豚の兒を買ひました。

家に歸つて來る途中に、小さな木が横になつてゐました。お婆さんは、

豚の兒にそれを跨ぐやうに云ひ付けましたが、豚の兒はどうしても云ふことを聞きません。そこでお婆さんは豚の兒をその儘にして、少し歩くと一匹の犬に出合ひました。

「犬さん、犬さん、豚の兒をば噛んでおくれ。豚の兒が木を跨ぎません。それ故妾は今夜歸れない。」

とお婆さんが云ひました。けれども犬は豚の兒を噛みませんでした。お婆さんはまた歩き出しました。すると今度は一本の棒に出合ひました。

「棒さん、棒さん、犬をば打つておくれ。犬は豚の兒を噛みません。豚の兒は木を跨ぎません。それ故妾は今夜歸れない。」

とお婆さんが云ひました。けれども棒は犬を打ちませんでした。お婆さんはまた歩出しました。すると今度は火に出合ひました。

「お火さん、お火さん、棒をば焼いておくれ。棒は犬を打ちません。犬は豚の兒を噛みません。豚の兒は木をば跨ぎません。それ故妾は

今夜歸れない。」

とお婆さんが云ひました。けれども火は棒を焼きませんでした。お婆さんはまた歩出しました。すると今度は水に出合ひました。

「水さん、水さん。火をば消しておくれ。火は棒を焼きません。棒は犬を打ちません。犬は豚の兒を噛みません。豚の兒は木をば跨ぎません。それ故妾は今夜歸れない。」

とお婆さんが云ひました。けれども水は火を消しませんでした。お婆さんはまた歩出しました。すると今度は一匹の牡牛に出合ひました。

「牛さん、牛さん。水を飲んでおくれ。水は火を消しません。火は棒を焼きません。棒は犬を打ちません。犬は豚の兒を噛みません。豚の兒は木をば跨ぎません。それ故妾は今夜歸れない。」

とお婆さんが云ひました。けれども牡牛は水を飲みませんでした。お婆さんはまた歩出しました。すると今度は一人の牛殺しに出合ひました。

「牛殺しさん、牛殺しさん。牡牛をば殺しておくれ。牡牛は水を飲みません。水は火を消しません。火は棒を焼きません。棒は犬を打ちません。犬は豚の兒を噛みません。豚の兒は木をば跨ぎません。それ故妾は今夜歸れない。」

とお婆さんが云ひました。けれども牛殺しは牡牛を殺しませんでした。お婆さんはまた歩出しました。すると今度は一本の繩に出合ひました。

「繩さん、繩さん。牛殺しの首を絞めておくれ。牛殺しは牡牛を殺しません。牡牛は水を飲みません。水は火を消しません。火は棒を焼きません。棒は犬を打ちません。犬は豚の兒を噛みません。豚の兒は木をば跨ぎません。それ故妾は今夜歸れない。」

とお婆さんが云ひました。けれども繩は牛殺しの首を絞めませんでした。お婆さんはまた歩出しました。すると今度は一匹の鼠に出合ひました。

「鼠さん、鼠さん。繩を噛んでおくれ。繩は牛殺しの首を絞めません。」

牛殺しは牡牛を殺しません。牡牛は水を飲みません。水は火を消しません。火は棒を焼きません。棒は犬を打ちません。犬は豚の兒を噛みません。豚の兒は木をば跨ぎません。それ故妾は今夜歸れない。とお婆さんが云ひました。けれども鼠は繩を噛みませんでした。お婆さんはまた歩出しました。すると今度は一匹の猫に出合ひました。

「猫さん、猫さん。鼠を殺しておくれ。鼠は繩を噛みません。繩は牛殺しの首を絞めません。牛殺しは牡牛を殺しません。牡牛は水を飲みません。水は火を消しません。火は棒を焼きません。棒は犬を打ちません。犬は豚の兒を噛みません。豚の兒は木をば跨ぎません。それ故妾は今夜歸れない。」

とお婆さんが云ひました。すると猫は、
「お前さんが向の牝牛の處へ行つて、お乳を貰つて來たら、鼠を殺してあげませう。」

と云ひました。それでお婆さんは牝牛の處に行つてお乳を貰つて來ま

した。猫はそれを舐めて了ふと、すぐに鼠を殺さうとしました。鼠は驚いて繩を噛まうとしました。繩は驚いて牛殺しの首を絞めようとなりました。牛殺しは驚いて牡牛を殺さうとしました。牡牛は驚いて水を飲まうとしました。水は驚いて火を消さうとしました。火は驚いて棒を焼かうとしました。棒は驚いて犬を打たうとしました。犬は驚いて豚の兒を噛まうとしました。豚の兒は驚いて木を跨ぎました。それで、お婆さんはやつと家に歸ることが出來ました。

第五章 優秀なる「お話」を得る方法

第一節 總 說

私は第四章に於て、優秀なお話の備ふべき條件を列擧し、更にその一つ一つに就いて、詳細な説明を加へました。それならば之に次いで、「如何にして這般の條件を備へた優秀なお話を得るか。」と云ふ問題が當然起つて來

なければなりません。私は本章に於て之を説いて見たいと思ひます。
私の考では、優秀なお話を得る方法は左の三つより外にないと思ひます。
即ち

- (A) 古來の書籍の中から、優秀なお話を選択すること。
 - (B) 古來より傳誦されたお話を改作して優秀なお話となすこと。
 - (C) 古來の優秀なお話を參考として、新らしく製作すること。
- 即ち優秀なお話を得る方法は、選擇、改作、新作の三つに歸すると思ふのであります。今節を分けて、一々之を研究したいと思ひます。

第二節 お話の選擇

古今の物語集から、優秀なお話を選択して、これを兒童に讀ませたり(文章は子供風に書きかへねばなりません)話して聞かせたりするのは、確かに賢明な方法であります。在來の物語集にも、優秀なお話を含んであるものが少なくありません。一例を擧げるなら、今日日本によく知られてゐるグ

リムの童話集の如き、確かに多くの秀抜なお話を含んでゐます。兒童教育に熱心なテルラー。ヒーマツシユ。トルル。ユスト等の諸學者が、何れも此の童話集から若干の童話を選択して、小學校修身教育に絶好の材料と稱したのを見ても、這般の消息がわかりませう。今左に優秀なお話を含む書籍中の最も得易いものの二三を列擧して、お話に熱心な人々の參考に供します。

- (A) 和漢の書籍
- (イ) 古事記
- (ロ) 日本書紀
- (ハ) 風土記
- (ニ) 日本靈異記
- (ホ) 今昔物語
- (ヘ) 宇治拾遺物語
- (ト) 十訓抄

- (チ)古今著聞集
- (リ)太平記
- (ヌ)源平盛衰記
- (ル)平家物語
- (ヲ)常山紀談
- (ワ)明良洪範
- (カ)鳩翁道話
- (ヨ)駿臺雜話
- (タ)武將威狀記
- (レ)史記
- (ソ)三國史
- (ツ)吳越軍談
- (ネ)酉陽雜俎
- (ナ)備齋叢語

(B) 印度の書籍

- (イ)バンチャタントラ
- (ロ)ヒトバデサ
- (ハ)チャータカ
- (ニ)カタサリツツアーガラ
- (ホ)ラーマヤナ
- (ヘ)マハーバラタ
- (ト)諸種の佛典等

(C) 西洋の書籍

- (イ)聖書
- (ロ) Legends of Greece and Rome... G. H. Kupfer
- (ハ) Favourite Greek Myths ... L. S. Hyde
- (ニ)希臘神話 (Balfin 原著杉谷代水氏譯補)
- (ホ) Stories From Chaucer... J. W. McSpadden

- (イ) Legends of the Middle Ages... H. A. Gaerber
- (ロ) Stories of King Arthur... U. W. Guller
- (ハ) Northern Mythology... B. Thorpe
- (ニ) Myths and Legends of Celtic Race... W. Rolleston
- (ホ) Irish Fairy Tales... W. B. Yeats
- (ヘ) English Fairy Tales... E. S. Hartland
- (セ) Scottish Fairy Tales... G. Douglas
- (ソ) Italian Fairy Book... N. Pogany
- (ゼ) Hungarian Fairy Book... A. Macdonell
- (エ) Turkish Fairy Tales... J. Kunos
- (ケ) Arabian Nights
- (コ) Grimm's Fairy Tales
- (ク) Andersen's Fairy Tales
- (カ) Basile's Pentamerone

- (キ) Gesta Romanorum
- (ク) Australian Legendary Tales... K. L. Parker
- (ケ) Myths and Legends of the Pacific North-West... K. B. Judson
- (コ) Fairy Tales From South Africa... Druke
- (カ) Animal Stories... A. Laing
- (キ) Aesop's Fables
- (ク) Plaedrus's Fables

此の外にも澤山ありますが、それは人々の採擇に任せて置きます。

第三節 お話の改作

第二節に於て、優秀なお話を得る一的手段として、在來の書籍からの選擇を挙げました。けれども是等の書籍中にも、優秀な話が無數に含まれてゐると云ふ譯ではありません。中には兒童の天性に適しないやうな、庸劣なものも少なくありません。換言すれば、昔から傳へ來つた儘の形式では、

私達の期待を満足させるやうなお話が、甚だ多数であるとは云へないのであります。そこで茲に改作問題が起つて來るのであります。即ち在來のお話にある變改を與へ、悪いところを去り、良いところを探るか、少しく添加する必要が起つて來ます。それならば如何なるお話に、如何なる變改を加ふれば、優秀なお話となるかと云ひますと、

(A) 長い物語を短くすること。

(B) 短い物語を長くすること。

(C) 道徳上よりの變改。

の三つに歸すると思ひます。

第一項 長き物語を短くすること

如何な物語が短くする必要があるかと云ふに、ブライアント女史が唱導したやうに、

(A) 話したいと思ふお話が、立派な教訓や事件を含んでゐるに拘はら

ず、其の内容が長きに失してゐる場合。

(B) 次には(A)の如き性質を備へてゐる物語が幾つも集つて、一の「お話」を構成してゐる場合。

かやうなお話は、兒童の注意を散漫にし、興味を減殺し、倦怠を感ぜしむる弱點を持つてゐる故、是非とも相當の壓縮を加へなくてはなりません。即ち一方に於て不必要な分子を除去するに努めると共に、他方に於ては、材料の配列に改正を施さねばなりません。

けれどもかやうな手段で、長きに失するお話を壓搾して簡明ならしめる以前に、先づ考へねばならぬ先決問題があります。それは何であるかと云ふに、變改を施さんとするお話そのものの内容と形式とを、能く了解し能く玩味することでありませう。而してお話を能く了解し玩味するには、其の内容と構造とを精細に分析することが極めて肝要であります。「自分がまさに變改を加へんとするお話は抑々何を意味してゐるだらうか。」そのお話を一貫する條理の鎖の結目は何處と何處とに存してゐるだらうか。」そのお話

の興味を惹く點は那邊に潜んでゐるだらうか。——凡そ是等の諸點を洞察するには、是非とも周到慎重なお話の分析が必要であります。元來お話の改作にありては、その目的とするところは、原作に代るべき新しい別個のお話を得ると云ふことではありません。何處までも原作の精神眞髓を失はないで、其の形式に改良を加へると云ふに過ぎないのであります。即ち其の改變は内容の改變でなくて、單に形式の改變でなくてはなりません。それ故改變せんとするお話を精細に分解考査して、その核心を捕捉し得たならば、次には下のやうな手段によつて、之に改變を加へるのであります。

- (A) お話が起す興味の漸層の階段の數に注目し、もし其の階段の中の二つ、又は二つ以上が、一個の階段に包含させることが出来ること認めたら、之を壓搾して一個の階段となすが好い。
- (B) 次にはお話の中に含まれてゐる説明的記述が長きに失してゐるとき、又はそれが餘り亂雜にお話中に織込まれてゐるときには、之を簡明にして主たる筋との關係を緊切明確ならしめるがよい。

- (C) 一のお話が二つの中心點を有してゐるときには、之を分ちて二つのお話となすか、若くは一つを捨てて、他の一つを探るがよい。
- (D) 叙述の糸が二筋になつてゐる場合には、其のよりよき一つを選んで、嚴密忠實にそれを辿るが好い。

かやうにしてお話の仕組が簡明になつたなら、次には其の中に現る多くの人物に淘汰を行つて、主要な人物達ばかりを保存し、それから更にその主要人物の中にも、殊に主要な一個の人物に着目し、總ての記述がみな之を中心として輻輳するやうに努めなくてはなりません。かやうにしてお話の焦點を一にすると云ふことは、單にお話の簡練に必要なばかりでなく、兒童の注意と興味とを強く吸収するにも、缺くべからざる要件であります。何故なら、叙述の着眼點が屢々變更すると、兒童の頭腦が混亂するからであります。

第二項 短き物語を長くする場合

兒童の心は簡朴なものであります。また單純なものであります。それ故彼等の心に適合するお話も簡朴單純なものがよいのは勿論であります。無暗にくどくど、長たらしく複雑なお話は、決して兒童に歡喜を興ふる所以ではありません。それならば、何故に短い物語を改作して、わざと長くする必要があるかと云ふ疑問が起るてありませう。

成程兒童のお話としては、短くて素朴なものがよいに相違ありませんが、過ぎたるは及ばざるが如しで、餘りに短縮に過ぎたお話になると、却つて兒童の理解と感興とを妨ぐるものであります。それ故かやうなお話は、適度の長さにて改めて、兒童の思想感情に適應するやうにする必要があるのであります。

それならば、如何な種類のお話が、之を長くする必要があるかと云ふと、

(A) 寓話
(B) 逸話

であります。蓋し逸話や寓話は、大概の場合に、非常に壓縮された形式を

探るものであります。所謂寸鐵人を刺す底の短文に深意を藏するものであります。それ故大人には多大の興味を興へますが、兒童の物語としては、餘りに簡潔に、餘りに壓縮され過ぎてゐます。従つて其の儘の形式では、兒童をして完全に了解し、完全に玩味し、完全に興味を感ずることが出来ないであります。かくて茲に原話に適度の敷衍を興へる必要が起つて來るのです。

(A) 寓話の敷衍

寓話は其の形式が極めて簡素で、所謂寸鐵刺人的の面目を備へてゐます。そしてかやうに形式が簡潔であるのは、次の二つの原因から來てゐます。第一、先に述べたやうに、寓話は諷刺教訓を核心として、これに物語風の衣を着せたものであります。其の主眼とするところ、其の本體とするところは、何處までも内存してゐる教旨であつて、外形の物語めいたところは、第二義のものに過ぎないのであります。それ故外形は極めて簡素で、單に

話に筋立を興へるだけで満足するので、決して童話のやうに、美しく、豊麗な美肉を骨の上にかぶせることがないのであります。餘り奇麗な、豊麗な外衣を着せると、その寓話を讀むものは、若くは聞くものは、話の外衣にばかり心を奪はれて、大事な核心たる諷刺教訓を閑却するようになります。かくては作者の視つた的を外れる譯で、折角の作者の苦心も水泡に歸するのであります。それ故寓話はその形式が簡素であればある程、本來の面目を發揮するのであります。奇警で緊縮して、きびくと小氣味よく引きしまつたところに、寓話の妙味があるのであります。

第二には、寓話の對象の性質が、自ら寓話の形式の簡潔を要求してゐるのであります。私達は寓話が童話と違つた對象を目當にして生れたと云ふことを忘れてはなりません。童話は兒童、若くは兒童のやうな幼稚な心性を有する未開民族を對象とする興味中心の文學でありますが、寓話は之に反して大人——文化の程度の進んだ國の大人を對象として生れた、教訓中心の文學であります。この事は寓話作者の傳記を讀めば、明瞭に了解する

ことが出来るのであります。

かの寓話界の大立物たるイソップに就いて考へますと、彼は晩年になつて、パピロニヤの帝王に暇を乞うて、諸國遊歴に出かけ、先づ希臘に行つて、到る所の人々に道を説きました。それからデルホス島に渡つて、島民の教化を試みましたが、彼等は暴戾無道で、少しもイソップの言説に耳を借しませんでした。その上にイソップが島を去らうとする時、

「彼は聞ゆる學匠である。もし此處を去つて、自分達の惡名を言觸したら此の島の名折だ。殺して了へ。」

と言つて、竊にイソップの荷物の中に黄金を入れて置いて、後から追掛け、荷物の中から其の黄金を引出して、盗人の惡名を負はせました。そして牢舎に投じて了ひました。そこでイソップは一個の寓話を作つて、彼等を諷しました。文録舊譯伊曾保物語に附加されてゐる彼の傳説によると、其の寓話は次のやうになつてゐます。

諸々の蟲どもが無事に參會をした時、別して鼠と蛙いかにも親しう言

合はせた。或時鼠の許に蛙を招いて、種々の珍物を揃へて饗應いた所で、其後又蛙も鼠を饗應さうずるとて、招き寄せ、河の邊に出て云ふは、わが私宅は此邊ぢや、定めて案内を知らせられまじいとて、鼠の足に繩を附けて、蛙水の中に飛入つたれば、鼠も引入られ、命の終と思つて云うたは、さても蛙は情も無う吾を謀り、命を絶つものかな。吾こそ水屑と成果つるとも、後に残る一族共、いかてか汝を安穩に置かうぞと、互に浮いつ沈うづする所に、鶯と云ふ猛悪人、此こそ究竟の所望なれと云うて、宙に擱うて飛上り、二つ共に裂き食はれた。即ち此の寓話は、イツツプ自身が言つたやうに、「我が唯今の有様は、彼の鼠に少しも劣らぬ。われ面々に珍物の如く道を教ふれども、其の返報に命を失はるる。吾こそ空しう果つるとも、バビロニヤ、エチプトの人々吾を深う愛せらるれば、此儀は唯は沙汰されまいぞ。」と云ふことを諷刺するために生み出されたのであります。

更にフィードラス(希臘人)と云ふ寓話作者の作つた寓話の一つに、

一人の年老いた女が、道に轉がつてゐる空樽を見つけて、その傍に歩み寄ると、樽の底にこびりついてゐた酒の香が氣持よく鼻を襲うた。で彼の女は一生懸命に鼻柱を樽にくつつけて、

「いい香だ。樽の底にこびりついてゐる酒の滓さへ、こんなだから、一杯入つてゐたときは、さぞや好い香がしたらう。」と云つた。

ブルマン氏の説に據りますと、フィードラスは、テベリアス帝を諷諫するために、此の寓話を作つたやうであります。帝には若いときから多くの悪い沈湎癖があつて、それが老年になつてもまだ残つてゐたので、それを忠告諷刺したのであります。(普通の人ならば悪い癖の存続を悪臭ある事物に譬へそうでありますのに、フィードラスが之を芳香ある酒の残滓に譬へたのは、實に面憎い程痛烈だと云はねばなりません)。

かやうな譯で、寓話は大概の場合きびくとした、短い形式を採つてゐます。一二の例を挙げますなら、支那の寓話に、

川蚌出でて曝す。而して鵝其の肉を啄む。蚌合して其の啄を箝す。鵝曰く、今日雨ふらず、明日雨ふらずば、必ず蚌脯あらんと。蚌も鵝に謂つて曰く、今日出でず、明日出でずば、必ず死鵝あらんと。兩者相捨つることを肯んぜず。漁者得て並せて之を擔ふ。(戰國策)

これは、趙王の家臣蘇代が主君を諫めて、燕を伐つことを止めさせるために説いた寓意談で、「二人が相争ふときは、他のものに乗せられる。」と云ふ意を諷したものであります。また呂氏春秋を讀むと、下のやうな寓意談が載つてゐます。

楚人の劔舟中より水に墜つ。遂に其の舟を契りて曰く、是れ吾が劔の従りて墜つるところなりと。舟已に行いて、劔は行かず、亦感ぜざる乎。

この物語は、物に拘泥して變通を知らざるの愚を説いたのであります。以上二つの寓話を見ますに、簡潔勁拔、眞に得易からぬ好話であります。けれどもそれは大人に對しての好話であつて、兒童にとつては決してさう

てはありませぬ。兒童のお話としては、餘りに壓縮に過ぎてゐます。即ち優秀なお話としての大切な條件——適度の活動と、適度の情緒の動きとが缺如してゐるのであります。それ故是等の寓話を兒童の性情に適應するやうにするには、形を少しく長めて、一方に於て人物を活動させると同時に、他方に於て情緒の閃めきを見せるやうにしなければなりません。(而して此の變改に當つて、飽くまで原意を傷けぬやうにすべきは勿論であります。) 試みに私が之を改作した例を擧げて、讀者の参考に供しませう。

第一の寓話の改變

むかし／＼或る川に一匹の蚌が住んでゐました。或る日のこと、あまりお天氣がよくて、ぼか／＼と温いので、蚌はのそ／＼と川から這ひ上りました。そして柔かい草の上に寝轉んで、ぼかんと口を開けて、日當ぼつことをしてゐました。

すると一匹の鵝が、これもお天氣に浮かれて、好い餌物を探しながら、川の端にやつて來ました。すると大きな蚌がぼかんと口を開いて、

じつと寝轉んでゐますので、鵝は覺えず、

「占めた。うまいものが見付つたわい。」

と云ひながら、蚌の傍にかけ寄りました。そして先づ一口と、啄を貝の中に突込みますと、蚌はすかさず、じゆつと口を開ぢて、鵝の啄を締めつけました。鵝は吃驚して脚を踏んばつて、啄を抜き取らうと焦りました。どうしても抜けません。困つたことになつたとは思ひましたが、弱身を見せるのも残念だと、わざと威張り返つて、

「おい／＼蚌公。いい加減に口を開けろよ。此の儘にしてゐて、今日も明日も雨が降らなかつたらどうする。今に蚌の干物ひまが出来よ。」と嚇しました。けれども蚌の方でも決して負けてはゐません。今よりも一層啄を締めつけながら、

「何を云つてるのだい。お前こそ用心しろよ。今日も明日も啄が抜けなかつたらどうする。今に鵝の干物ひまが出来よ。」と云ひました。そして兩方とも意地悪く頑張つてゐますと、一人の漁いし

師いがその傍を通りかかりました。

「やあこりやどうだい。蚌公と鵝公とが噛み合つてるよ。うん乃公も今日はなか／＼の仕合せものだわい。」

と云ひながら、腰を曲めてむづと蚌と鵝とを掴み上げました。蚌と鵝とは、仕舞つたと思つて、身を腕うでいて逃げようとしたが、どうしても漁師の大きな手から免れることが出来ませんでした。

第二の寓話の改變

或る時大勢の人が渡場から舟に乗つて、川を渡つてゐました。舟の中に坐つたり、舟の縁ふちに腰を掛けたりして、煙草など吐ふかしながら、のんきにいろ／＼と冗談を云ひ合つてゐました。すると楚の國生れの一人の男が水の面を覗き込む拍子に、刀がする／＼とこつて、ぼちやんと音がして水の底に沈んで了しまりました。大勢の人は急に話をやめて騒さわぎ出しました。

「どうしたんです。」

「あの人が刀を川に落したんです。」

「そりや困りましたね。」

と云つて、船縁につかまつて、水底を透して見るものあれば、船頭を呼びかけて船を止めろと叫ぶものもありました。ところが剣を落した本人は、その騒ぎを見向きもしないで、先つきから爪の先でしきりと船縁に傷をつけてゐますので、

「どうしたんです。」

「何をしてゐるんです。」

と乗合のものが尋ねますと、その男はやつと顔を上げて、

「そんなに騒がなくてもいいんですよ、御覧なさい、私が早速の機轉で、船の縁に傷をつけて置きました。傷の下に當るところを捜しさへすりや、大丈夫見付かります。」

とさも得意そうに云ひました。それを聞いた乗合の人達は、

「何んだ、船はずん／＼進んでるのに。」

と可笑しくなりましたが、口にはそれと云ひかねて、お互に顔を見合せて笑つてゐました。

(B) 逸話の敷衍

逸話は云ふまでもなく一種の歴史的物語であります。人物の性行などを、輕々に描き去つて、而してその人物の眞面目を躍動させるところに、逸話の逸話たる本領が存してゐます。それ故逸話の筆は飽くまで簡勁でなくてはなりません。長くなれば、千鈞の力が出ません。しかしそう云ふことは、大人の讀物としての場合に云ふべきことであつて、これを兒童の物語に使用する場合には自ら別途の用意がなくてはなりません。試みに常山紀談卷三の第十八章に掲げた一の逸話を御覧なさい。

北條丹後一尺四方の白練に黒き蟻を繪に書て、指物にしけるを、謙信見て、汝が指物餘りに小きは、如何なる仔細ぞと問はるるに、丹後、

誠に味方よりは見え難く候べし。左は有れども、進むに先蒐し、退くにいつも殿せんには、他人の大なる指物も、此の小四半と、敵の見る所は同じからんと存ずる也と申すをば、謙信理也と言はれしとぞ。

此の逸話は餘程古人の興味を牽いたと見えて、享保年間に著された關八州古戦録にも載つてゐます。即ち同書の卷六を讀みますと、

北城丹後守長國未だ彌五郎と申せし時、幅一尺五寸許の白き練貫の四半に五六寸紀州の碩儒南方熊楠氏は、五六分の誤かと云つて居られますの馬蟻を墨にて畫き、捺物としたりける。先へ進み、敵の面前へ矢庭に乘着け、手詰の勝負を仕る分別なれば、愍に走り廻りの妨に罷成る大捺物、一向無益の事也と地盤し、隨分働の邪魔無き様に、小さく支度仕り候と申ければ、輝虎上杉謙信事の外悦び褒む。

となつてゐます。常山紀談の記事も、關八州古戦録の説話も、文體が朴素で簡勁で、いかにもきびくしてゐます。それ故大人の讀物としては、如何にも興趣に富んでゐますが、兒童に讀ませる、若くは聞かせるお話とし

ては、餘りに率直で、餘りに飾り氣に乏しいのであります。その上、お話の生命たる動作と情緒とを缺いてゐますから、此の儘の形式では、兒童の注意と興味とを牽くことが出来ませぬ。従つてこれを兒童の情緒に適應するお話とするには、是非とも、之を敷衍して話中の人物に相當の活動を演ぜしめ、それと同時に彼等の面目を躍如たらしめるだけの情緒の動きを見せなければなりません。

此の項を終るに當つて是非云つて置かねばならぬことは、短いお話を長くする場合にも、長いお話を壓搾するときのやうに、先づお話の分析が肝要であると云ふことであります。長いお話に於て、壓搾のための内容形式の分析が必要であるやうに、短いお話に於ても、敷衍のための分析が必要であります。お話を精細に分解して、其の眞意をしかと把握し、更に言外の餘情を掬し、進んでは其の周圍の光景、感情活動に對して、美しく且つ正當な想像を働かせて、而して後始めて自己の胸中に一幅の好畫が出来上ります。それを正當に叙述すれば、茲に立派な原作の敷衍が出来るのであり

ます。もしかやうな工夫と手段とを経ずして、ただ始めから漫然とお話を
長めようと試みるものがあつたら、その人は必ず惨ましい失敗に陥るに相
違ありません。

第三項 道德上よりする改變

長いお話を短くしたり、短いお話を長くしたりする改變の外に、道德的
見地から行はねばならぬ改變があります。即ちお話の中に含まれてゐる教
訓の意義に訂正を加へねばならぬことがあります。

それは何故かと云ひますと、現代の未開民族若くは私達の祖先達の抱い
てゐた道德觀念と、私達の抱いてゐる道德觀念との間に、多少の差異が生
じてゐるからであります。

一例を挙げますなら、未開民族(文明人の祖先もは大變機智を重んじます。
と云ふのは、彼等は猛獸毒蛇の横行するところに住んでゐながら、之を防
ぐに足るだけの武器を持つてゐません。それ故彼等は、どうしたら巧く其

の害を免れることが出来るかと、日夜心を悩ました。そして日常往來す
る森の中の動物生活を觀察してゐると、小さい、力の弱い動物は、常に機
智狡才を用ひて、體の大きい、力の強い動物の危害を巧みに免れてゐるの
に氣がつかしました。未開民族は之を見て、機智狡才が最も有効な危害防禦
法で最も安全便利な處世法だと悟りました。かくて彼等は、大變に機智狡才
を尊重するやうになりました。それ故彼等の童話の殆んど總てが、弱小な
動物が機智を弄して、強大な動物を馬鹿にする趣向となつてゐるのであり
ます。私達文明人の祖先も現代の野蠻人のやうな時代を経過して來たので、
未開民族と同様な童話を澤山語り傳へてゐるのであります。是等の童話で
は、いつも弱小な動物が狡智を廻らして、強大な動物を翻弄してゐます。
これが彼等の機智に對する道德的見解であつたのであります。

然るに今日となつては、私達の道德觀念が違つて來ました。今日では手
段の正邪に拘はらず、機智を弄して勝を制しさへすればよいと云ふ考は、
決して正しいとは見做されません。それ故機智の勝利を説く童話も、自ら

その趣向を改変しなくてはならぬやうになりました。例へば我が國の兎と龜との童話では、兎は自分の足の早いとを自慢して、晝寝をしたために競走に負けるとになつてゐます。けれども此の童話の古い形式は、そうではありません。兎と龜との間に、競走の約束が整うと、龜は窃かに大勢の龜を呼んで、競走の程路コチに少しづつ間を置いて草の中に潜ませて置きました。そして自分は到着點にかくれてゐました。いよいよ競走が始まると、兎は出發點にゐる他の龜を相手の龜と思つて、それを後にしてぐんぐん駈出しました。暫く行つて後を振向くと、前の方に隠れてゐた一匹の龜が、草の間から頭を出して、「兎公遅いぢやないか」と云ひました。兎は驚いて、その龜を抜いて暫く駈けた後、後を振向くと、又々前の方に龜の聲がして、「兎公遅いな。」と云ひます。いよいよ驚いて、一生懸命に駈け出して到着點に達すると、其處にはちやんと相手の龜がゐて、先刻から待つてゐたと云ひました。此の如くして龜は競走に勝ちました。

これが兎と龜との競走の原形であります。私達の祖先にとりては、此の

形式で充分でありました。その當時に於ては、狡才を弄して勝を得さへすれば、手段の如何は問はなかつたのであります。然し近代人にとつては、龜が用ひた手段は、正當な手段であるとは考えられません。不正であります。卑劣であります。それ故無名の作者があつて、趣向に多少の改變を加へて、今日の「兎と龜との競走」の形としたのであります。

更に一例を挙げますと、我が國の諺に「不信の龜は甲を割る」と云ふことがありますが、これは昔或る湖に一匹の龜がゐました。日早で湖の水が次第に涸れるので、大變に困つてゐますと、二匹の鶴がやつて來たので、他の湖に連れて行つてくれと頼みました。其の手段はと鶴が尋ねますと、二匹の鶴が一本の棒の兩端を掴み、その中央を龜がくはへるのだと云ひます。途中で口を開くと命がないよと鶴が云ひますと、決して口を開けぬと龜が堅く約束しました。て龜が棒の中央をくはへ、鶴が其の兩端を掴んで空中に舞上りました。子供達がそれを見て、大變笑ひ罵りますと、龜は約束を忘れて、口を開いて「何を笑ふのだ。」と云ふや否や、忽ち地上に落ちました。

其處へ豺がやつて来て、龜を食はうとしますと、頭と四肢とを甲の中に引込めたので、豺はどうともする事が出来ません。龜は豺を欺いて水中に遁れようと思つて、「自分は久しく日に干されてゐるので、こんな堅くなつた。自分を食はうと思ふなら、水に浸けて柔くするがよい。」と云ひました。そこで水に浸けると、忽ち逃げ出さうとしますので、豺は急に龜の後足を掴みました。すると龜は再び機智を弄して、「お前の掴んでゐるのは、木の枝だよ。」と云つて、大に笑ひましたので、豺は龜の足を放して、急いで傍の木の枝を掴みました。その隙に龜は水中深く沈みました。

即ち此の童話も、弱小な動物が機智狡才を弄して、強大な動物を欺く趣向になつてゐます。然るに後世では此の趣向に満足しないやうになりました。龜は決して口を開かぬと云ふ約束を破つた應報がなくてはならぬと云ふので、龜が空中から地に落ちると、甲が割れて生命を失ふと云ふ趣向に改變したのであります。

かやうに在來のお話に含まれてゐる教訓的意義に改變を加へて、今日の

正しい道德觀念に適應するやうにしなければならぬ場合も、決して少くありません。それ故お話の改變の第三として、特に一言して置くわけがあります。壇上の教師、家庭の父兄も此の點に深い注意を拂はれんことを切望するのであります。

第四節 お話の新作

お話を新しく作ると云ふことは、一寸考へると容易いやうで、實は非常に困難な仕事であります。改作の場合ならば——長い話を短くする場合でも、短い話を長くする場合でも、また教訓的意義の改變の場合でも、既にそこに原作があります。そしてそれ等の原作は、たとひ多少改變さるべき點があるとしても、大體から云へば優秀なものであります。何故かと云ふに、それ等のお話は、人の心の素朴簡拙な時代の産物でありますから、今日の兒童の性情に巧みに適應してゐると云ふ長所があります。それ故之を改變するに當つては、それを基礎として、考慮を廻らし、長所を保存して

短所を改むれば、それでよいのであります。然るに新作となると、基礎となる内容形式がありません。作者は萬事新らしく産み出さねばなりません。ところが作者は児童ではない。作者の思想感情と児童の思想感情との間には、大きな距離があります。現代の未開民族や、私達の祖先ならば、大人でも今日の児童のやうな心の世界に住んでゐたのであります。現代文明國の大人の世界は、児童の世界とすつかり違つてゐます。従つてその大人が作つたお話は、どんなに苦心しても、野蠻人や古代人の生んだお話がもつてゐるやうな児童の世界を再現する力が乏しいのであります。

それならば、私達はお話の新作を断念しなくてはならぬかと云ふに、決してそうではありません。相當の準備をすれば、或る程度までは成功することが出来ます。相當の準備と云ふのは、

- (A) よく児童を研究すること、即ち努めて児童に接觸して、その思想感情行動の微細な點までも、周到慎重に觀察すること。
- (B) 古來の優秀なお話を反復熟讀して、自らその妙境に透入すること。

かやうにして私達は先づ児童の世界を了解し盡し玩味し盡さねばなりません。私達の心を児童の心に同化し盡さねばなりません。それからいよいよお話の製作にとりかかるのであります。製作上の心得としては、先に挙げた優秀なお話の有すべき條件即ち、

- (A) 適度の活動性
- (B) 適度の情緒の動き
- (C) 適度の空想的要素
- (D) 繪畫的印象
- (E) 適度の變化性
- (F) 適度の反覆性

が最も大切で、成るべく是等の條件を満足させるやうな考へて、筆をとることが肝要であります。

是等の條件は、お話の新作に努めて採り入れるべき點てありますが、これと反對に注意して避けねばならぬ多くの條項があります。即ち、

- (A) 兒童の想像力の誤解。
- (B) 道德に拘泥すること。
- (C) 科學に拘泥すること。

兒童の想像力の誤解と云ふのは、兒童の想像力を餘りに誇大視すること、兒童の擬人思想を極端に考へることとあります。先に云つたやうに、兒童の想像力は自由てはありますが、しかし簡單で、素朴であります。決して大人の想像力のやうに、複雑な、縹渺たるものではありません。それ故お話の結構にもあまり複雑な、*florid*な空想を誘導することを避けねばなりません。それから擬人想像を極端に應用することも、努めて避けねばなりません。兒童が好んで外界の無生物を生命あり精神あるもののやうに想像するからと云つて、お話の中に何でもかでも擬人するのはよくないこととあります。極端な擬人は兒童の了解力以上のものであります。それ故擬人の法を使用する場合には、兒童と無生物との間に、脈々たる理解同情の通路を開いてやる程度に止めて欲しいのであります。

次には道德に拘泥することを避けねばなりません。お話の中に好んで不道德な事件を誘導することは、勿論喜ぶべきことではありませんが、それだからと云つて、如何なお話にも必ず教訓的意義を含ませねばならぬと主張するのは誤りてあります。道德の含まれてゐないお話でも、優秀なお話たるを妨げないのであります。兒童に歡喜を興へ趣味を高めるお話なら、必ずしも道德的意義を持つてゐなくても結構です。一體兒童と云ふものは、無道德時代(不道德時代と同一視してはならぬ)から、漸次道德意識が發達して來るのでありますから、お話を兒童に授くる場合にも、無道德なお話から始めて、次第に道德的色彩を持つお話に進めて行くのが、正常な徑路であります。道德と云ふことに餘り拘泥し過ぎて、まだ道德意識の發展しない兒童に、小むづかしい教訓的お話を授くるのは、彼等の美しい想像の世界を殺滅し、彼等のお話に對する感興を冷却するばかりであります。次には科學に拘泥することを避けねばなりません。何故かと云ふに、お話の世界は殆んど常に空想の世界であります。(歴史物語や實話や自然界の

お話等を別にして、そして是等のお話の興味の大半は、その内容が科學を超越し、科學の束縛から自由であると云ふ點に存してゐます。兒童の思想感情が自ら這般の傾向に流れてゐるのでありますから、彼等のために製作すべきお話に於ても、自由に想像世界を展開してよい譯であります。桃の中から人間が生れるのは、生理的觀念に反馳してゐるとか、文福茶釜に毛が生えるのは、科學的思想に矛盾してゐるとか、そんなことに拘泥するのは、兒童の心の世界の何たるかを知らぬ愚昧漢であります。

第六章 お話の取扱方

第一節 總 說

何人も知つてゐるやうに、兒童にお話を授くる方法は二つあります。即ちお話を書いたものを讀ませることが其の一つで、お話を話して聞かせるのが他の一つであります。言葉を換へて言へば、兒童の眼を通してお話を

傳へる方法と、兒童の眼を通してお話を傳へる方法とであります。眼を通じてお話を傳へる方は、之をもものに記せば、それがお話を傳へるものの役目が済むので、兒童がそれを自身で讀んで楽しむのであります。ただ優秀なお話を兒童の前に提供する注意と努力とを怠らなければそれでよいのであります。

然るに耳を通してお話を兒童に傳へる場合には、そう簡単にゆきません。優秀なお話を兒童に提供する注意と努力との外に、お話の話し方や、各種のお話特有な注意や、兒童の年齢とお話との關係等に就いて、色々考案しなければならぬやうになります。即ち一言にして云へば、お話の取扱方に關する研究が必要となつて來るのであります。

さて耳を通してお話を兒童に傳へる方法に、また二つあります。講話的方法と開發的方法とが即ちこれでありませぬ。

講話的方法と云ふのは、父兄や教師が家庭や教室に於て、兒童のためにお話を物語り、娛樂と歡喜の裡に教訓を與ふることを目的とし、開發的方